

# 南総里見八犬伝を読む——怨霊・仮装・王権

## The fiction of Bakin IV : Nanso-Satomi-Hakkenden

葛 綿 正 一

KUZUWATA Masakazu

本稿では出典論に深入りすることなく、曲亭馬琴（一七六七—一八四八）の『南総里見八犬伝』をもつばら小説として読み解いてみたいと思う。したがって、テキスト分析を中心に進めていくが、時として自伝的コンテキストや歴史的コンテキストを参照することになるだろう。波乱万丈の伝奇小説、絢爛たる幻想小説といった『八犬伝』の自明性に揺さぶりをかけるためである。『八犬伝』は虚構ではあるが、同時代の知を集積した図書館でもあろう。したがって、同時代の言説を総動員しなければならない。

ここで特に注目するのは、玉梓の怨霊であり、俳優に仮装した毛野であり、神童としての親兵衛である。玉梓、俳優、神童といったテーマの広がり、『八犬伝』を思いもけない方向に導いてくれるからである。『八犬伝』からみえてくるのは、怨霊と手紙、仮装と虚構、王権と資本の世界ではないだろうか。以下は、そうした観点からの作品分析である。

あらかじめ本稿の概要を示しておく、第一回から第二〇回を対象とした第一節では玉梓の怨霊を取り上げ、言葉の行き違いの問題として論じる（そこから使者と手紙の役割が明らかに）。第二一回から第四〇回を対象とした第二節では女性たちを取り上げ、不本意な懷妊について論じる。第四一回から第六一回を対象とした第三節では毛野を取り上げ、仮装の論理を浮き彫りにする。第六二回から第八二回を対象とした第四節では信乃と大角を取り上げ、孝という観念のもつ暴力性を浮き彫りにする（そこから家と日記の関係が明らかに）。第八三回から第一〇三回を対象とした第五節では舩虫を取り上げ、欲望と記号の問題について考える。第一〇四回から第一一五回を対象とした第

六節では隠微をめぐって稗史の八番目の法則を提案する。第一一六回から第一三五回を対象とした第七節では素藤を取り上げ、王権と資本の問題について考える（そこから作品と市場の関係が明らかに）。第一三六回から第一五三回を対象とした第八節では異夫婦を取り上げ、絵画と盲目の問題について考える。第一五四回から第一七六回を対象とした第九節では親兵衛を取り上げ、再び王権と資本の問題について考える。第一七七回から第一八〇回を対象とした第一〇節では「大団円」と「回外剩筆」を取り上げ、馬琴における虚構の問題について考える。拡散的な議論になるが、神話的モチーフ、物質的身体的テーマ、文字の効果に着目しながら読み進めていきたいと思う。

なお、原文の引用は新潮古典集成（濱田啓介校訂）によるが、岩波文庫（小池藤五郎校訂）も参照した。また他の読本や書簡の引用は『馬琴中編読本集成』（汲古書院）、『馬琴書翰集成』（八木書店）による。

## 一 玉梓・怨霊・発端——手紙と使者

『八犬伝』は恐ろしい小説である。ちよつとした言葉の行き違いが重大な事態を引き起こすからである。

瓢核のごとき齒を切て、主従を佖とにらまへ、「怨しきかな金碗八郎、赦んといふ主命を拒て、吾儕を斬ならば、汝も又遠からず、刃の錆となるのみならず、その家ながく断絶せん。又義実もいふがひなし。赦せといひし、舌も得引ず、孝吉に説破られて、人の命を弄ぶ、聞しには似ぬ愚将也。殺さば殺せ。兇孫まで、畜生道に導きて、この世からなる煩惱の、犬となさん」と罵れば、「物ないはせせ、牽立よ」と金碗が令を受、雑兵四五人立かかりて、罵り狂ふ玉梓を、外面へ牽出し、懸て首を刎たりける。

（第六回）

里見義実一度口にした言葉を取り消してしまったために、玉梓の恨みを受けることになる。首を刎ねても言葉の効果はもとは戻らない。その言葉から逃れるには「外面」に出るしかないが、すぐさま内部に引き戻されてしまうようにみえる。玉梓の言葉は呪いとして強くテクストを拘束する。可憐で凶暴な「齒」に注目しておきたいが、呪いとは言葉による拘束のことなのである（祈りがあるとすれば、それは拘束を解き放つことであろう）。飼い犬に娘を与える口にした義実、再び言葉に縛られてしまう。

最期の軍議に暇なくて、その事ははや忘れたるに、犬は却いはれし事を、忘れねばこそ、わが虚言を事実として、寄手の陣へ潜び入るとも、二三千騎の大將たる、景連を輒く殺して、その首級を齎すこと、不思議といふもありあり。

(第九回)

一度口にした言葉はもとに戻らない。たとえ冗談であつても、それは実現されなければならない。義実には忘れていた言葉に復讐されてしまうのである。『八犬伝』の主題は、こうした言葉の重さであろう。実際、漢字が重苦しく紙面を覆っている。しかし同時に、これほど言葉の軽やかさを感じさせる小説もない。重苦しさを突破するときの言葉の動きが痛快なのである。また「虚言を事実として」現実化する小説であり、軽やかに流れていたはずの言葉が不意に重く沈み込んでしまう。したがって、言葉による拘束と解放が『八犬伝』の主題だといふことができる。伏姫が三歳になつても話すことができないとする設定は重い。

軽やかに流れる言葉と重く留まる言葉、言葉による拘束と解放、そうした二面性が顕著に現われる瞬間があるとすれば、それは手紙を書くときではないだろうか。手紙のやりとりにおいては、言葉の行き違いが時として露呈する。とりわけ出版依頼の手紙に対しては多大な困難が付きまとつたはずである（鈴木牧之の場合）。

出版に際しても、同じような言葉の行き違いを体験したであろう。馬琴は出版をめぐる様々な困難に直面することになったからである。出版の企画と中絶、不本意な校正、著作の無断出版、絵師との齟齬（葛飾北斎の場合）などである。

ここでは、「玉梓」が手紙と出版にかかわる言葉、たという点に注目してみたい（「1」）。もともと、「玉梓」は使者や手紙を意味する言葉である。しかも「玉梓と密通して」（第二回）、「しのびしのびに、美女玉梓に思ひを運し、密事を果ん為」（第六回）とあるので、玉梓と密通や密事は縁語関係にさえみえる。また、上梓といえは出版のことなので、「玉梓」に出版の意味を見て取ることも不可能ではない。『八犬伝』は玉梓の怨霊に祟られる物語だが、玉梓の怨霊は手紙や出版をめぐる様々な困難さのメタファーになつてるように思われる。玉梓の怨霊が言葉の行き違いのことだとすれば、言語にとつて怨霊の発生は不可避である、そうした観点から『八犬伝』を読み直してみよう。

かかりし後、定包は、滝田の城を更めて、玉下とこれを名け、玉梓をおのが嫡妻にして、後堂に冊せ、その余、

光弘の嬖妾にかはるかはる枕席をすすめさせ、富貴歡樂を極めしかば、威を隣郡に示んとて、館山平館へ使者を遣し：

(第二回)

悪人を排除しようとした善意のテロルも結局も利用されるだけに終わり、山下定包が神餘光弘を騙し討ちにして城主となるわけだが、玉梓について語った後に、使者に言及している点が注目される。「包」や「冊」が書物にかかわる言葉であることはいうまでもない。第五回には「定包が書簡を乞とり」とあり、「数通の檄文を書写め、件の鳩の足に結びて、放さばかならず城へ還らん」という作戦もみえる。定包を討ち取って里見義実が城主となるが、安西景連が攻めてくる。その契機となったのが、使者の問題にほかならない。第八回に「景連は、老党を使者として遣して」とあるが、第九回の冒頭をみてみよう。

却説安西景連は、義実の使者なりける、金碗大輔を欺き留めて、しのびしのびに軍兵を部しつ、俄に里見の両城へ、犇々と推寄たり。

(第九回)

「使者には汝を遣さん」と拔擢された大輔は拘留されてしまう。大輔は金碗孝吉の息子である。管領に援軍を頼もうとするが、書翰がないため使者として認められない。「義実の使者と称して、来由を説、急を告、をさをさ救ひを乞まうせども、義実の書翰なければ、狐疑せられて事整ず、又いたづらに日を過す」(第一〇回) このように、『八大伝』は、使者Ⅱ手紙の問題に取り憑かれているのである。

伏姫懷妊の発端となるのは、またしても使者であり手紙である。

貞行再びうち驚き、「現某がきのふ見し、文字はここにひとつもなく、如是畜生発菩提心、と二行八字に変ぜしは、奇也、奇なり」とばかりに、呆ること半晌あまり、又いふよしもなかりけり。義実はこの一句に、忽地睨りて巻おさめ、「蔵人汝がまうす所、偽なくは不思議の事也。抑きのふ使者と称して、この書を通与せし翁が年齢、その面影はいかなりし。詳に告よ」と宣へば：

(第二一回)

「堀内貞行とり次て、使者の口状云々と、義実に告まうせば…」というのが貞行の役割だが、そこに手紙が謎として送り付けられる。手紙を出した人は生きているのか死んでいるのかさえ判然としない。その意味で、すべての手紙は亡霊の手紙であり、使者と死者は区別がつかない。そんな使者Ⅱ死者によって送り付けられた手紙のせいで、人は懷

妊するのではないだろうか。第一〇回の挿絵で伏姫が握っているのは巻物である。

「吾儕に良人はなきぞかし。去歳のこの月この山に、入りにし日より人を見ず。一念称名読経の外は、他事なきものを、何によりて有身るべき。あな嗚呼しや」と堪かねて、思はず「ほほ」と笑ひ給へば：（第二二回）

伏姫はなぜ自分が懐妊するのか理解できない。『八犬伝』がとても特異なのは懐妊がごとく不本意なものだという点だが、これについては後述したい。すべてが玉梓の呪いに発していると義実は語る。

今その筆の迹を見て、この禍の胎るところ、因果の道理を知覚せり。われ当国に義兵を揚て、山下定包を討しとき、その妻玉梓を生拘つ。陳謝理りあるに似たれば、赦し得させんといひつるを、大輔が父八郎孝吉、いたく諫て頭を刎たり。これによりてその冤魂、わが主従に祟をなす歟、とはじめて心つきたりしは、金碗孝吉が自殺のとき、朦朧として女の姿、わが眼に遮りにき。かくてかの玉梓が、うらみはここに嘸らず、八房の犬と生かはりて、伏姫を將て、深山辺に、隠れて親に物をおもはせ、伏姫は又思ひかけなき、八郎が子に撃れたり。加以大輔は、罪なうして亡命し、忠義によつて罪を獲たり。（第二三回）

玉梓の怨霊は使者Ⅱ死者の手紙として作品中を彷徨しているのではないだろうか。伏姫の不本意な懐妊も、手紙の問題を介して提起されているようにみえるからである。『八犬伝』においては父親など問題にならず、伏姫は不本意な手紙という形で子供を受け取ってしまったのである。実際、伏姫の出産は文字の産出にほかならない。

「…その父なくてあやしくも、宿れる胤をひらかずは、おのが惑ひも、人々の疑ひも又いつか解くべき。これ見給へ」と臂ちかなる、護身刀を引抜きて、腹へぐさと突立て、真一文字に掻切給へば、あやしむべし疵口より、一朵の白気閃き出、襟に掛けさせ給ひたる、彼水晶の数珠をつつみて、虚空に舂ると見えし、数珠は忽地弗と断離れて、その一百は連ねしままに、地上へ憂と落とどまり、空に遺れる八の珠は、粲然として光明をはなち、飛遠り入簀れて、赫奕たる光景は、流るる星に異ならず。主従は今さらに、姫の自殺を禁めあへず、われにもあらで蒼天を、うち仰ぎつつ目も黒白に：（第二三回）

伏姫は「如是畜生発菩提心」の結果として懐妊し、「仁義礼智忠信孝貞」を出産するのである。飛び散る文字は、手紙の文章にたとえることができるだろう。文字ある玉だけが飛んでいくからである。「百八の珠閃き沖り、文字なき

珠は地に墮て、その余の八は光明をはなち、八方へ散乱して、遂に跡なくなりし」と語られている（第一四回）。

この後、『八犬伝』の女性たちは次々と不本意な懷妊を強いられるが、それは不本意な手紙を受け取ってしまったということなのである。第二一回では八つの文字が梅の実に転写されている。誰もが読み解けるわけではないが（その梅熟するに及びては、彼八行の文字は滅たり。この故に里人等は、只八房を賞するのみ、文字の事はしるものあらず）、梅は「生め」と読み解くことができる。

第六回末尾に「玉梓が悪念は、良将良義士に憑ことかなはず、その子その子に貧縁で、一旦不思議のいで来る事、その禍は後竟に、福の端となる、この段までは廻なり」と馬琴が記すように、玉梓の怨霊は直接目的に襲いかかるものではなく、たえずずれていくほかないものであろう。「閱者彼賊婦が怨言に、こころをとめて見なし給ひね」と続くが、玉梓の言葉に拘束された者のみが、その亡霊に脅えるのである。肇輯の末尾では、次のように弁解している。

作者云。この段八犬士の起るべき、所以ををさをさ演記して、肇輯五巻の尾と定め、既に首巻に十回の題目を載るといへども、思ふにまして物語は、ながながしくなりしかば、巻の張数はや盈て、今この段卒るによしなし。さは巻数に定めあり、又張数にも限りあり。毎編これを過すときは、売買に便宜ならずといふ、書肆が好み推辞がたし。

（第一〇回）

次々に増えていく冊子、これは次々に崇つていく玉梓の怨霊と密接にかかわっている。玉梓は怨霊となつて作品の内外をさまい続けるからである（同時代には『大夷評判記』というものまで出版されている）。本屋の意向を考えると、玉梓の怨霊を制御しているのは資本の力だといつてもよい。

「伏姫をもて妻せん、と思ふ折から大輔は、使して遂にかへらず」と義実は語っているが（第一三回）、大輔は帰還することのない使者であらう。誤つて伏姫に弾丸を撃ち込んだ大輔は、出家しゝ大法師と名乗る。このゝ大法師こそ手紙の人であり（ゝ大の書翰を閲するにゝ）第九七回）、物語の使者として、怨霊の記憶を配信し続けるのである（2）。『八犬伝』を亡霊の手紙と呼ぶとすれば、その宛先は誰だろうか。確かに塩沢に届き、松阪に届き、高松に届いた。だが、誰よりも『八犬伝』の宛先は馬琴自身であったと考えることができる。家が断絶するであらう、この玉梓の言葉に馬琴は脅かされたはずである。馬琴は玉梓の呪いを振り払うかのように書き続けるのである。現代の読者は、そ

のような手紙として『八大伝』を受け止めることができるのではないか。

注  
〔一〕 信多純一『里見八大伝の世界』（岩波書店、二〇〇四年）は玉梓を玉の使者と指摘している。安房を舞台にした『皿皿郷談』第八には「玉梓の、使なりしにいかれば、墓なき夢を心あてに、問も定めず殺しけん」とみえるが、『八大伝』同様、玉梓の殺害を後悔しているのである。さらに近世の言説空間に探ってみよう。すると、「今の世に、草の実の仁に、玉づさといふがあるも、件のわらの結びさまに似たり」（『玉勝間』一三）という用例がみつかる。この用例によれば、玉梓とは捻れ結ばれているものであり、仁の核心にさえ位置づけることができる。したがって、『八大伝』における捻れたものに注目する必要があるだろう。「八房は毒婦玉梓が後身（第一七回）」とあるが、『八大伝』にみられるのは『白鯨』のような白の神話学ではない（オシラサマの白でもない）。むしろ斑の神話学であり、それが『八大伝』のクロマトロジーである。

〔二〕 大法師について、野口武彦『江戸と悪』（角川書店、一九九〇年）は世界に句点を与える注釈者とし、小谷野敦『新編八大伝総想』（ちくま学芸文庫、二〇〇〇年）は孤立する作家自身の姿と指摘しているが、本稿では配信する人と捉えておく（「」に拘泥して言えば、反復と強調の人である）。第八七回で「大法師は再び鉄砲で球体を発射することになる。鉄砲は当時『種子島』と呼ばれていたが、馬琴における島の問題について考えさせるだろう。なお、莊助の場合は幼児のときの書き付けが手紙であり（紙の端に書記あり）、小文吾の場合は喧嘩を売っていた太太の垂れ幕が手紙の役割を果たしている（素に紙牌を結さげて……）第三二回」。

## 二 不本意な懷妊——文字と球体

伏姫の不本意な懷妊についてみてきたが、さらに同様の事態を探ってみたい。もともと顕著な例は、懷妊を疑われる雛衣の場合である。「よしや妾が有身たるか、否を定かにせられずとも、竟に脱れぬ定業ぞ、と覚期究めて侍るかし。身に覺なき中腕の病痾、過ゆく光陰共侶に、かう腫張たることにし侍れば、疑はるるも無理ならず」（第六五回）。この台詞は雛衣のものだが、伏姫のものでもあろう。意図せざる懷妊によつてうろたえる女性、それが馬琴読本に共通する形象だからである。

同様の事態はいくつも見て取ることができる。たとえば、金碗孝吉の妻の場合である。「人の女兒に瑕疵では、今さら親が許すとも、絶て合する面はなし。浅ましき所行してけり、と百遍悔、千遍悔ども、後悔其処に立ざれば、し

びしのびに濃萩には、墮胎せよと勧めるのみ」と孝吉は語っていた(第七回)。こうして不本意にも生れたのが金碗大輔すなわち、大法師である。

信乃の誕生も思いがけない懷妊に由来している。「家路にいそぎ給ふに、現に神女を目撃し、一顆の玉を授らるるを、愆て受外し、玉は犬のほとりに展ぶを、とらんとて索給ふに、遂に又あることなし。この比よりして有身り給ひて、次の年秋のはじめに、吾儕を挙げ給ひしとぞ、母の告げさせ給ふにてしりぬ」と信乃は振り返っていた(第一九回)。もちろん、待望の男子誕生であつたはずである。しかしながら、『八犬伝』においては、そうした場合でさえ、不本意な懷妊、不本意な誕生という形をとるのである。

父親の番作は「我夫婦に幸なくて、男児三人挙げかど、みな殤子にてなくなりたるに、この度も又男児なれば、一トしほ心よはくなりて、想像のみせられはべり。この子が十五にならん比まで、女子にして孕ば、恙あらじと思ひ侍り」と語っている(第一七回)。信乃は男子ではなく、女子として育てられる。これがまず不本意な形ということになる。だが、それだけではない。より深刻な形で、信乃は自らの誕生を不本意なものとして受け取るのである。すなわち、信乃が自らの存在を否定するときである。「彼犬を獲てわれ生れ、彼犬ゆゑに父を喪ふ」と語っているが、父の自死に衝撃を受けた信乃は自らの誕生の契機となつた犬を殺そうとする。殺した犬の胎内から出て来るのが玉である。

「…劊にし犬の瘡口より、不思議に出る玉匣、二親ながら喪ひつ、われも覚期の今果に及びて、わが名を表る孝の一字、定かに見ゆる玉ありとも、六日の菖蒲十日の菊也。何にすべき」とうち腹たてて、庭へ発石と投棄れば、玉はそがまま反かへりて、懷へ飛入たり。怪しと思へど搔撈とりて、又擲ては飛かへり、とび返ること三たびに及べば、呆れ果て手を叉ぎ、霎時按じてうち點頭…

(第一九回)

玉を投げつけること、それは自らの存在を否定する身振りなのだが、玉は跳ね返ってきて、信乃を生へと促す(星飛馬の孤独なキャッチボールのように)。

『八犬伝』の時代設定が鉄砲伝来以前であるにもかかわらず、伏姫に球体が撃ち込まれるのも偶然ではない。信乃を特徴づけているのは、そうした球体の運動である。名高い芳流閣の場面には球体の運動からくる緊張感と解放感が漲っている。「十手を丁と受留る、信乃が刃は鏝除より、折れて遙に飛失せつ。見八、得たり、と無手と組むを、そが



随左手に引着て、迭に利腕楚と取り、振倒さん、と曳声合して、倅つ倅るるちから足、此彼斉一踏込して、河辺のたへ滾々と、身を輾せし覆車の米苞、坂より落すに異ならず、高低險しき棧閣に、削成たる臺の勢ひ、止るべくもあらざめれど、迭に拿たる拳を緩めず、幾十尋なる屋の上より、未遙なる河水の底には入らで、程もよし、水際に繋る小舟の中へ、うち累りつつ撞と落れば、傾く舷と、立浪に、炎と音す水烟、纜丁と張断て、射る矢の如き早河の、真中へ吐出されつ。余も追風と虚潮に、誘ふ水なる洄舟、往方もしらずなりにけり」(第三一回)。

丁の緊張感、そして張り詰めたものが途切れたときの解放感が、この場面を生彩あるものになっている。転がり落ちるもの、吐き出されるもの、いずれも球体の運動にしかみえない「丁」。注目すべきは、追いつめられていく二人の犬士が、追いつめられた犬の動きを反復している点である。

驚きあはて途を失ひ、旧の路へは逃もかへらで、墓六が宅地を遶りて、背門のかたへぞ走りける。信乃糠助はこれを見て、「あな便なし。そなたにあらず、こなたへ逃よ」といはぬばかりに途をひらきて左右にわかれ、杖を揚て追蒐れば、犬はいよいよ狼狽さわぎて、走り脱んとしつれ共、この処は瓢のごとく、口一方にして、前面に路なし。

(第一八回)

逃がそうとするにもかかわらず、犬は自ら窮地に陥っていく。同様に、出世を望む信乃と現八は高いところ高いところをめざし、かえつて袋小路に追いつめられるのである(追いつめられるのである「瓢」のレトリックに注目したい)。信乃と現八は玉のごとく落下することと結び付き、後に莊介と道節は玉を交換することと結び付く。

浜路の母親にも、不本意な懷妊を指摘できる。伏姫の胎内から玉が飛び散った場面に「黒白に……」とあったが、母親の名前が「黒白」というのも偶然ではないだろう。「初の側室は黒白にして、後に来つるは阿是非なり。そのときわが父戯れに、両妾に宣く、汝等兩人誰にもあれ、男児を産るものを、後妻にせんと約し給ひつ。かくて阿是非は有身て、長祿三年九月戊戌の日に、男児を産てけり、出生の子は則われ也。(中略)されば約束なりければ、わが母をもて正妻に、推のぼし給ふになん、黒白は妬怨みつつ、気色にはあらはさず、寛正三年の春、渠は女の子を産てけり」(第二八回)。

こうして生れたのが道節と浜路なのだが、父親の言葉の軽さは里見義実のそれに等しいだろう。ここから凄まじい

惨劇が生まれるからである。阿是非は黒白を毒殺し道節を縊り殺そうとする。

そのような母親から生れたがゆえに、浜路は懷妊を禁止された存在となる。懷妊を許されるのは、里見義成の娘で浜路によく似た浜路姫のほうである。浜路と浜路姫は『弓張月』の白縫＝寧王女のごとき二重の存在である（いずれにおいても鳥が媒介している）。馬琴は「二女一体」と呼ぶが（第六九回）、そこには隠蔽のトリックが働いているように思われる。白縫と王女を一体化させるとき、大和と琉球の差異が隠蔽されるように、浜路と浜路姫を一体化させるとき、両者の差異は隠蔽されてしまうからである。

「宿因あれば形体を借りて、事情を告侍り」とあるが（第六八回）、一体化は浜路姫にとつて不本意な懷妊のようなものであろう。怨霊の憑依といつてもよい（第一〇九回でも夏引の怨霊が浜路姫に取り憑く）。一体化によって後者は前者に飲み込まれる。一種の自動人形、カラクリ人形だが、宿因があれば形体を借りて取り付くのが、馬琴の作中人物であり、自己とは他者に取り憑かれたものにすぎないといえる（第六八回の信乃は球体を撃ち込まれることで、はじめて浜路と再会できる）。

小文吾の妹、沼蘭の場合も、不本意な懷妊の一例であらう。「網より落るを拾ひつつ、吞たるは彼玉なるべし。かくて彼玉は、その腹中にあること十五年、沼蘭が十六歳の春、房八に帰ぐに及びて、いく程もなく有身つ、その年の冬生れたる、赤子の左の掌に、その玉を握れども、時到來ねばいまだ撥かず。今又ここに四年に及びて、件の玉は見れにき」と小文吾は語る（第三七回）。

沼蘭は玉を飲み込んだため思いがけず懷妊してしまうのである。生れてきた親兵衛は左手が不自由なままである（野口英世の伝記のように）。祖父の朴平は山下定包を討とうとしながら誤つて神餘光弘を討ってしまった男だが（「彼朴平が失は、尤わが父の憾る所」）、その報いということになる。父親の房八は次のように語っている。

原來わが子は宿世あり、渠は坐艸の上よりして、左の拳を撥ねば、厄弱者とて賤しめられ、大八といふ渾名さへ、負せられてもかくまでに、親には生れ勝たりにき。

（第三七回）

親兵衛の場合もまた、不本意な誕生だったのである。「父房八に蹴れしとき、この痣はいで来しを、人みな今までしらざりけり」とあるが、父親が誤つて蹴ってしまったときに親兵衛誕生の瞬間といえるかもしれない。

ここで散種としての痣について考えてみるべきだろう。痣は誰かの意図のもとに刻印されているわけではない。むしろ、痣は散らばった点や線の配置から読み取るべきものである（「痣」は志が変容した姿といえる）。悪漢に捕われた親兵衛はさらなる試練を受ける。

舵九郎は見かへりつつ、朽樹の株に尻うちかけて、脇腋に抱きし稚児を、弄玉のごとく投揚て、地上へ墮とうち落せば、息も絶べく哭叫ぶ…

（第四〇回）

泣き叫ぶ赤子は裸の人であり、人の裸の姿である。球体の動きが印象的だが、これもまた不本意な誕生神話の一環にほかならない。泣き叫ぶ親兵衛にはサソノの面影を見て取ることができる。だからこそ、一瞬の天変地異とともに伏姫という冥界の母のもとに行くのである（2）。

道節の乳母となる音音も不本意なまま懷妊してしまう。「いと若かりしその昔、彼処へ参り仕へし比、あるべき事歟、御内の若党、姥雪世四郎といふ和郎に、思ひおもはれ、胆太くも、人視の関を幾遍歟、踰てあふ夜の情の塊り、有身しより絆発覚て、郎と共に縛められ、命を召るべかりしに」と語っている（第四六回）。音音と世四郎との間に生まれた双子が力二郎、尺八であり、不本意な誕生であつたといえる。そのため世四郎は積平と名を変え、網船を貸す漁師となるが、『八犬伝』が水の世界の物語であることを印象づけている。積平は渡し守のごとく犬士を対岸へ渡すのである（『船日記』の一枚を裂いて信乃に托した手紙も重要な役回りを演じる）。第五輯の音音と第九輯の於兎子は音が似ており、ともに夫を語る女である。

音音の嫁となつた曳手、単節だが、夫が不在のまま不可解な妊娠をする（今さら奴們が、有身るべうも侍らねど、只怪しきは腹内にて、折々動くもの侍り」第一〇五回）。

毛野に関しても不本意な誕生を指摘できる。「墮胎の葉を三日つづけて飲せしかども、させる験のなかりしかば、原来血塊也けりとて、遂に追放されにけり」（第五五回）、こうした事態にもかかわらず誕生するのが毛野である。「月満れどもいまだ生れず、懷孕既に三稔にして、粟飯原の家断絶により、母は相模の足柄なる、犬阪村に在りし時、点燭時候に外に出しに、忽然として流星に、似たる一隻の光物、南の方より晃めき渡りて、墜ると思へば俺母の、懷にぞ入りにける」（第八二回）。そして女装することになる。「嫌忌を怕れて某を、女の子に扮て字育れしより、鎌倉に移住

みては、梨園の隊に入るといへども、既にして復習の、志移ることなく、年十三になりし時、父のの一字を取て、名を胤智と命ぜしは、所得の玉に見れたる、文字をも窃に表せしなり」。

馬琴の神話学において多淫なものは懷妊することがない。それが玉梓、船虫、妙椿である（『弓張月』の淫婦中婦君も同様であろう）。この欲望の系列に対して、庇護の系列を指摘できる。それが伏姫、妙真、音音である。こちらはかつて懷妊したものということになる。かつて懷妊したもの、これから懷妊するもの、決して懷妊しないもの、これが馬琴神話学の力テゴリーにはかならない（祖母、女、毒婦）。

注

〔一〕 第一回が船で安房に向うところから始まっていたように、『八犬伝』は船による巡島の記録といえる。第三一回に「と見れば、あやしき放舟、潮に引れ、波に揺れて、河源より流れ来つ、水落木に墮れて、招かずも、こなたの岸に著を見れば、船中に兩個の武士あり、此彼倒れて、死せるが如し」とあるが、江戸湾は船という球体を吐き出したり吸い込んだりしている。もちろん、そこでは交易が行われる（第五八回）。

〔二〕 馬琴は割注で子供への関心をみせているが（関東の俗、小児を罵りて餓鬼といふ）第四〇回、「関東の俗、男児の二三才より、四五才なるを坊といふ」第四一回、親兵衛の挿話であることに注目するべきであろう。ちょうど馬琴に孫ができた時期である。なお、親兵衛が苛まれる場面は『墨田川梅柳新書』の梅若殺害場面に似ている（珠玉を泥中に投て…）。

### 三 俳優・仮装・展開——三度の変身

歌舞音曲は網乾左母二郎とともに登場してくる。「遊藝は、今様の艶曲、細腰鼓、一節切なんど、習ひうかめずといふことなし」とあるが（第二三回）、この歌舞音曲は仮装のテーマと密接にかかわっている。本物の刀をすり替えるのは左母二郎の仕業だからである。「わが刃を、幕六が鞘に納め、又信乃が刃を取て、わが刀の鞘に納め、又幕六が刃をもて、信乃が副刀の鞘に納るに、孰も長短等しきにより、しつくりとて恰好し」（第二四回）。

仮装のテーマを全身で体现しているのが犬阪毛野であることはいうまでもない〔一〕。仮装は犬阪の「反」と響き合うが、毛野は三度、姿を変えている。最初は女田楽であり、二度目は乞食であり、三度目は坐撃師である。千葉、諏

訪、湯島と三度、場所を変えている。

ここをもてこの度も、件の女田楽等を招きよして、その技を試みたるに、そが中に、旦開野といふ少女の、年は二八ばかりにて、顔色も美しく、技も堪能のものなりければ、そを只一人留置て：

(第五六回)

那寒山拾得に、似て非人とは知られたり。そが中に一個の乞丐の、年齢は四十許、變の一足にあらねども、故疾なるべし足跛たるを、鎌倉蹇児と喚做したり。又一人は少年にて、襪襦ながらの夏衣、麻敷生絹敷蟬の羽に、素肌の衣通りし、身の皮醜からざるを、相模小猴子と号たり。

(第七九回)

話表、武蔵州豊嶋郡、湯嶋の郷に祭られ給ふ、天満天神の神社は、いぬる文明十年に、扇谷の内管領、持資入道建立したり。(中略) 無下の田舎でありけれども、這神社のみ月に日に、詣る道俗多かりければ、餠餅菓子ななどを、鬻ぐ坊賣からず。呪師刀玉の、猿楽を做すもあり。そが中に、坐撃鎖鎌の技をもて、耽黒子を除く菓と、磨齒砂を売るものあり。

(第八八回)

興味深いことに、毛野は集団の匿名性の中に身を隠し「そが中に」という言葉とともに個体化されて登場してくるのである。毛野を特徴づけているのは、仮装と技能と放浪性である。社会的秩序などに束縛されてはおらず、性差さえ越境する。「意ふに汝は瘋病人歟、然ずば敵の間諜児にて、我を撃まく欲するに、術拙くて、時宜を得知らず」と問ひ質されているが(第九二回)、毛野は病人でもあり間諜でもある。時機をわきまえることのない毛野はきわめて遊撃的な存在といえる(湯島天神から泉鏡花へと系譜を作ることができる)。「犬阪主は、文あり武あり。その學術の広博なる、陰陽卜筮説相まで、よくせずといふことなし。真実に軍師の才也」(第九五回)とあるように、その技芸ゆえに軍師にもなるのだろう(「磨齒砂」は玉梓の齒を削ぐものかもしれない)。

「浮たる技もて世を渡る、俳優などはさもあらん。われは素より色を好まず」と小文吾は語っているが(第五六回)、毛野は八犬士のなかで異色といえる。「築垣へ、登るもはやき田楽の、技に熟たる身の翩し、閃りと松に手をかけて、彼方の庭へ降ると思へば、姿は見えずなりにけり」とあるように、たちまち消え失せてしまう。「毛野は閃りと身を跳らして、一反許隔りたる、舟へ発動と飛入たり」とあるが(第五七回)、この輕業に注目しておきたい。信乃と現八が玉のごとく落下して結び付くのに対して、小文吾と毛野は別れ別れとなる(「件の舟の往方もしれず」)。

毛野は玉梓とも、伏姫ともほとんど接点がない。毛野の復讐は里見家とは無縁のものである。物質的な技術をもつ毛野にとつて、怨霊など単なる妄想にすぎないだろう。後に里見家の軍師となるが、里見家に忠義を尽す必然性が毛野には見当たらない。毛野は王権に従属した存在ではない。軍師としてしかるべき役割を果たすだけであり、別の国に行けば、そこでまた仕事をするだけであろう。実際、毛野はいつも行方不明の状態にある。苗字の犬阪に「反」が含まれているのは意義深い。毛野は、卓越した技能において里見家を裏切りかねないからである。

毛野は「宇宙の間に不平の事」第一とされ、孤立無援である（第五五回）。「家系正しき武士なりしに、われいかなれば幼少より、俳優人となるのみならず、たまたま男子と生れながら、女子となりて世を渡れるは、人間の不幸、これにますものなしといへども、又これなくはいかにして、彼常武等に近づくべき」と毛野は語っている（第五七回）。不本意な誕生と成長を余儀なくされるが、仮装こそが毛野の魅力である。また、それが作品展開の原理にもなっている（2）。『八犬伝』は仮装による反転なしには展開しない小説だからである。

「常武は、をさをさ声色をのみ嗜む、鳥計の驕者なりければ、さる技に長て、且兒妍き淫婦を、多く婢妾としつつ、生平に歌舞せなどすれどもなほ飽かで、他郷より来ぬる俳優も、己が愛するものあれば、その費を歎ふことなく、幾月の久しきまで、なほ家に留置て、酒宴の興にぞ備ける」（第五六回）。こうして毛野は仇を討つために、相手の欲望に付け込む。そのため仮装には背徳性がつきまとうのである。毛野の仮装には背徳性を指摘できるだろう。皆殺しの場面はいうまでもないが、より深刻なのは身体障害者を見殺しにするところである（3）。

浴せかけたる郷武が、刀の冴はこの世の別路、憐むべし、鎌倉蹇児は、背の真中一刀に、斫られて仆るる身は二段に（中略）。余程に相模小猴子は、久しく樹蔭に躲ひて、緯の始末を闕窺をり、方纔若党が主の刃を、拭んとせし後より、閃りと出てそが項髪を、搔抓み引よせて、一丈あまり投退て、衝と郷武に近着て、刃を引提し右の手を、握りたる無敵の挙動、思ひかけなき事なれば……（第八〇回）

これは毛野の父が殺され、名刀落葉が奪われた場面に似ており、はなはだ興味深い。

初大刀の深痕に右手衰へて、只受ながすのみなれば、縁連は踏込踏込、はや頸捕て刀尖に、推貫きてさし揚たり。思ひかけなき事なれば、胤度が従者等、罵り騒ぎて別よしもなく（中略）。時に並松の樹蔭より、頬被りせし一箇

の癖者、忽然と顯れ出て、道次に捨措たる、嵐山の尺八と、小篠落葉の両刀を、手早く箱より引出し、小腋に抱きて逃んとす。  
(第五五回)

木陰に隠れて刀を奪った悪漢を模倣するかのよう、毛野もまた木陰に隠れて目的を遂げるのである。そのため鎌倉塞児を見殺しにしたかにみえるのだが、そうした仮装や偽装なしには復讐を成し遂げることができなかったということであろう。目的のためには手段を選ばない、そんな背徳性が毛野には付きまとうのである。親兵衛の場合は木陰から陽気に飛び出すが（傍なる樹の蔭に又人ありて天地に响く声をふり立」第一〇三回）、すぐに飛び出したりはしないのが毛野の智ということになる。

第一五八回には毛野の仮装作戦が出てくる。「こも亦毛野が謀る処、この辺には扇谷の、間諜児徘徊して、虚実を覘ふも猶あらん、と思ふ心を友勝に、恁々と囁き誨え、又猿八と喚做す一個の雑兵の、好みて猿樂をよく做す者に、件の謀計を行はせしに、果して敵の間諜児、餅九郎を釣出して、反て友勝等は、汲引を得たり」。これによれば、毛野は演劇を活用しているのである。

八犬士が里美家を見捨てるのは、毛野の発議によつてである。「汝等いまだ思はずや。先君御父子の、仁義の余徳衰へて、内乱將に起らまぐす。（中略）這故に洒家八名は当所を去りて、他山に移らまぐす。汝等盍ぞ俱に致仕して、共に他郷へ去ざるや」と語っているが、毛野がまず口火を切るのである（第一八〇勝回下編）。

仮装は怨霊の呪いはね除けるものであり、王権の支配に抵抗するものではないだろうか。怨霊の呪いですべてが動きを止めようとすると、動きを与えるのが仮装であり、王権の支配のもとですべてが動きを止めようとすると、動きを与えるのが仮装であるように思われる。第四回で乞児に仮装して義実を導いていたのは、孝吉であつた（灰を吞、漆して、姿を変て故君の仇を、狙撃んと思ふのみ」第六回）。仮装は『八犬伝』における展開の原理なのである。道節は山伏、小文吾は旅商、大角は売卜師にそれぞれ仮装している。

第八〇回に「木葉忽地零ることあり、因て落葉と命けらる。村雨丸と相似たる、奇特のあるよし」とあるが、村雨丸と落葉という二つの名刀の共通点は何か。それは刀のまわりに身体障害者と呼ばひ寄せてしまう点である。村雨丸の持ち主の番作は廃人になつていたし、落葉に斬られるのは鎌倉塞児である。そうした組み合わせによつて、名刀の力

を強調しているのであるが、逆に明らかになるのは言語と身体之力である。実際、番作の言語と身体、鎌倉蹇児の言語と身体は見事に生動している。仮装のもつ力の極限ともいえる。

別のところで馬琴は誤字脱字を落葉にたとえていたが（書を校するは、風葉と、塵埃にしも異ならず」第九輯中帙附言）、名刀の名称にこめられているのは誤字脱字を一掃したいとの願望かもしれない。

第八八回に「猕猴は杪を彼此と、木伝ふ枝に絆の紐の、幾重ともなく膝れて、果は短うなりしかば、是にぞ猕猴は駭慌て、引抜かんとせし程に、倒その身引締られて、苦むこと甚く、はや精竭けん衰へて、絶も果べき形勢なりし……」という場面がある。猿は自らの綱に絡め取られ、命を落としそうになる。毛野は苦もなく綱を解きほぐすのだが、こうした危険性は毛野自身も有していたといえるだろう。主人に縛られると、自らも身動きがとれなくなってしまうからである。

第一五三回には「道節は、卒然と焦燥て、噫大阪が迂遠なる恁る折に坐興がましき、謎語をもていふことかは、疾うち出しね、と急する」とある。道節が直線的だとすれば、毛野は曲線的であろう。それが仮装のテーマと密接な関連があることはいうまでもない。

本稿では玉梓、毛野、親兵衛を中心にみていくが、それは亡霊、俳優、神童が『八犬伝』の重要な三角形だからである。亡霊と俳優は背徳性で類似し、俳優と神童は遊戯性で類似し、神童と亡霊は無垢という点で類似している。逆にみると、亡霊と俳優は遊戯性という点で対立し、俳優と神童は無垢という点で対立し、神童と亡霊は背徳性で対立している。

## 注

〔一〕毛野については、松田修「幕末のアンドロギュヌスたち」（『闇のユートピア』（新潮社、一九七二年）を参照。なお、川村二郎『里見八犬伝』（岩波書店、一九八四年）は『八犬伝』における女性原理を指摘する。確かに、信乃の女装は女たちの世界との濃密な繋がりを示している。しかし、毛野の女装は女たちの世界と切り離されており、男たちの世界へ参入するためにある。

〔二〕『犬夷評判記』（徳川芸文類從）で馬琴は「すべて小説は文面に仮話あり」と述べ、玉梓の祟りは「文面の仮話也。本来の面目にはあらず」と述べている。つまり、『八犬伝』自体が仮装であり、玉梓の怨霊もまた仮装ということになる。



〔3〕鎌倉龜児の挿話と非人敵討狂言の関係については、河合真澄『八犬伝』と演劇（『近世文学の源流』清文堂、二〇〇〇年）を参照。

## 四 孝の暴力——家族と負債

亀篠、墓六夫婦が信乃、浜路に対する場面で發揮しているのは、孝の暴力とでもいふべきものである。

墓六は少荘より、水練には長たり、且く水底を潜て、右手にからめる網の緒を解流し、信乃が跳り入るに及びて、忽地に浮揚り、いたく溺るる如くにす。信乃はこれを救んとて、墓六が手を取れば、墓六も亦信乃が腕を、楚と捉て放さず、深水へ引て只管に、推沈んとする……（第二四回）

墓六は溺れたふりをして信乃を水中に沈めようとしている（墓蛙の作戦である）。水中で絡め取られる息苦しさ、それが孝の息苦しさにほかならない。「この孤を養ひとりて、人となさずは先祖へ不孝」と言つて、番作の死後、信乃を引き取つた墓六夫婦は孝の観念を利用している。

浜路も慌忙ひつつ、「おん憤はさる事也。且この刃を放給へ」といへば頭をうち掉て、「いないな放さぬ。殺せ殺せ」と狂ふをやうやく亀篠が、抱縮て、傍を見かへり、「浜路は灸を押す如く、とばかりしては事果す。親を殺すも、殺さぬも、おん身が心ひとつにあらん。禁るばかりが孝行賊。鈍しや」と叱られて、玉なす涙をふり払ひ……（第二六回）

墓六は自害するふりをして浜路に宮六との結婚を迫っているが、これは孝による圧迫である。番作の姉、亀篠は、そうした孝の暴力に加担しているのである（泥中の亀のごとき執念深さをもつ）。

一角、舩虫夫婦が、大角、雛衣に対する場面で發揮しているのも、恐ろしい孝の暴力にほかならない。

当下一角は、只管款待す角太郎と、雛衣を見かへりて、「言改めていふにはあらねど、老ては物に忪情なく、むじんなる事をいひもせん。さばれ孝行を尽さん、と目今いひし和殿也。雛衣も何にまれ、親のいふことを背きはせじ。さりとて背く歟、いかにぞや」と笑つつ問ふ（中略）。拭ふ虚泪を、見まねに舩虫鼻うちかみて、「喃角太郎よ、雛衣よ。凡生として活る物の、命を惜ぬ例はなきに、その胎内の子も母も、爹々公の病痾の良薬に、なるは

こよなき孝行節義、廿四孝と名にしおふ、唐山人も及んや…」

(第六五回)

一角は自らの眼病を治療するため、雛衣に胎児を提供するよう迫っているが、これはもはや孝という名の殺人である。船虫は、そうした孝による殺人に加担しているのである。

では、なぜ孝という觀念に屈服するのか。それは負い目の感情からであろう。親への負い目、それゆえに親の暴力に屈服してしまうのである。信乃も大角も悩める青年にみえるが、それは負い目を背負ったハムレット的位置に立たされているからである。実際、『八犬伝』には負債の感情が充満している。たとえば、玉梓の言葉への負い目であり、八房と交わした言葉への負い目である。仁義礼智という徳目を支えているのは、負い目の感情なのである(「1」)。「渠は債あるものなり。さればその身を愛せず、わが為わろき事はえいはじ」とは墓六の台詞だが(第一八回)、負債は人の行動を縛るものといえる。

墓六夫婦や一角夫婦が負い目の感情につけ込むのは、家産の問題と無縁ではない。亀篠が親切を装うのは、信乃や浜路の財産を横領するためであり(「2」)、船虫が親切を装うのは、大角や雛衣の財産を横領するためである(「件の金を略ん為也」)。

浜路姫の挿話における夏引、木工作、奈四郎の關係は、浜路の挿話における亀篠、墓六、左母二郎の關係を反復し発展させているようにみえる。亀篠と左母二郎が密通すれば、墓六は殺されるほかないだろう。それが夏引と奈四郎の密通、木工作の殺害という形になっているのである。木工作はむしろ番作に近いが、いずれにおいても、家主が死んだ後、誰が家産を継承するかという点が問題となる。

荒芽山の挿話で興味深いのは、経済的な交換が頻繁に出てくるところであろう。「郷導者は六里の程を、鳥銃の丸と火薬と、火索も加て賃金を、三百文と定めたり」とあり、荒芽山に入るにも金銭が必要とされる(第五九回)。これは単なる怪異譚ではなく、経済的な人間關係を背景とした物語なのである。『ハムレット』冒頭のように一角の亡霊が現れて、すべての事情を語っている。それによれば、偽の大角は怪猫の化け物であり、三番目の妻たる船虫は買われた女である(「仮一角は、妾買易て、只淫樂を旨としつる」)。動物との結婚という点で船虫と仮大角の關係は伏姫と八房の關係に相当するが、この場合は金銭の問題が絡んでいる。靈山を訪れ真相を探ろうとする現八は、大法師に相当

するだろう。仮一角は「自業自滅」と雛衣に自殺を勧めているが、一角の亡霊を代弁するのが現八の役割である。

負い目という点で注目するべきは第七三回末尾の記述である。「抑闘牛の一奇事は、越後雪譜中に載べきものなれども、毎歳筆研繁多にして、いまだ創するに遑あらず。且老歩旅行を數ふの故にいまだ彼州に遊ざれば、なほ事足らで歳月を歴たり。この故に、牧之の企望を空くせじとて、言のここに及べるなり」(第七三回)。「牧之の企望」というのは出版にかかわっている。牧之の著書を出版すると約束しておきながら、それは果されないままであり、馬琴には負債の感情がある。この一節は牧之の手紙への返事といつてよいが、後に続くのは、未認可の本が出てしまうことへの嘆きである。「予に校訂を乞ふして、恣に画を易、文を衍脱して、再刷するものありと聞ぬ。いづれにしても、馬琴は自分ではどうすることもできず、他者に脅かされているのである。出したい本が出せず、出したくない本が出てしまう、これは、亡霊に取り憑かれたような事態ではないだろうか。後述するように、馬琴は無許可版という仮装した亡霊に悩まされている。

負債という観点から、鈴木牧之宛の書簡に注目してみたい〔3〕。

貴兄に限り、如此無用の弁までながながしく認候而、備御笑候事ハ、風流のうへのミならず、德行ある御仁と及承候ゆゑ二御座候。帖二いたし候文通ハ、貴兄二限り申候。これらの趣、御合点可被下奉願候。只々義の一字を失ひ不申迄二て、実情ある友にハ勞をいとひ不申候。

(文政元年七月二十九日、牧之宛)

義ゆゑに文通すると宣言しているが、出版の約束を守れなくなると、馬琴が苦しい立場に追い込まれていくのは明らかであろう。この直後、馬琴はあたかも不義の例証であるかのように、京山に言及している(彼仁ハ世才にたけ候て、当座をよくして、人を歡せ候仁二御座候)。しかし、牧之の著作を刊行するのは、その京山のほうである。

誤ありては朽をしく候間、約束はいたしながら、稿本出来かね候間、年々催促頻りなれば、是非なく右之著述は、四五年前及断候。依之、牧之大に望を失ひ、ふりかえて京山にたのみ候。

(天保八年四月二二日、篠斎宛)

「約束」という名の負債を負っていたのが馬琴なのである。「誤」を恐れる馬琴は必死に弁解している。「京山は机上にとまある人なれば、輒くうけ引候て、自分の著述にせず牧之の著にいたし、謬あらんことを思ふ故に而、京山は校閲の様にいたし候。是は骨を折らずに、謬ありても自分の失にせざる為也」。あたかも「謬」のあるのは京山のほう

で、骨を折ったの自分だといいたいのかもしれない。

天保六年九月二五日付で牧之に送られた「一覽火中記」は、馬琴の書状に京山が評を加え批判したものだが、あたかも馬琴の文章に京山の怨霊が取り憑いているかのような体裁である。

『八犬伝』の石亀屋次団太は、地団駄を踏むからの命名だが、まさに文（ふみ）と韻を踏む。とすれば、越後出身の登場人物には、手紙をめぐる困惑の記憶が纏わりついているのであろう（次団太が後妻に追放される設定は馬琴の秘かな願望にみえるが、追放する後妻の名前は「嗚呼善」であり、愚かな善を意味している）。

天保一〇年六月九日、篠斎宛書簡には「越後の牧之の書状杯、毎度困り、媳婦二よませて聞候へども、女流故よみ得がたく、終に通用せざる書状、只今も一二通有之候」とある。馬琴の眼病のせいで、牧之の書状は困惑すべきものになっている。「通用せざる書状」という状態である。

文政元年一〇月二八日、牧之宛書簡では驚くほど素直に自らについて記していた。「是全ク再び家を興さんと存こみ、只一人の悴をもり立て、式十年來のその心がけ、一日も忘れ不申、先祖の遺徳、父母の大恩、亡兄の遺志を身一つ二引うけ候」。馬琴は先祖、父母、亡兄に対して負債があり、家を再興して、それを返却しなければならぬのである。馬琴にとって『八犬伝』は家の存立を目的とした作品であった。しかし、それを相続するのは、もはや滝沢家だけではない。いまや現代の読者すべてが、良かれ悪しかれ相続していることになる〔4〕。

「譬は宿の畜猫が、他し牡猫と尾ぎつつ、産たる子猫は母に隸て、その父はなきが如し」と語られているが（第四八回）、馬琴が恐れているのは、そんな父不在の事態であろう。馬琴は女たちに脅かされている。そのとき父の存在証明になるものがあるとすれば、それは負債の観念ではないか。負債の観念をもつことで父はかろうじて自らの存在理由を見出すことができるからである（馬琴は移り気な猫ではなく、忠実な犬に肩入れする）。

馬琴の「回外剩筆」によれば、『八犬伝』はもともとと負債と無縁ではない。最初の出版者は負担に耐えられず、第五輯刊行後、倒産してしまったからである（山崎平八、山青堂）。第六輯、第七輯は大坂から刊行されたが（美濃屋甚三郎、湧泉堂）、これは犬士たちの流浪と響き合うかのようだ。最後になってようやく江戸で出版されることになったのである（丁字屋平兵衛、文溪堂）。

ところで、犬村大角の挿話には眼病の父親が登場していた。この点は、親兵衛による虎退治の挿話を重ね合わせる興味深い。馬琴は次のように述べている。

虎と猫とは、その形状相似て、その氣を同くす。虎の人を躓けて、撲殺せしとき、速にこれを啖はず。死人の上を跳踰て疾視ときは、その死人おのづから立て帶を解き、衣を脱て又倒る。ここに於て、虎その赤裸になりしを見て、初てこれを啖ふといへり。猫も亦死人のうへを跳踰れば、その死人立て徘徊す。

（第六七回）

現八・大角の猫退治と親兵衛の虎退治には共通点がある。いずれも、眼病の人物が登場してくるからである。しかも、死んだものが甦るという点で共通している。

「荒芽山」のあらめには、目の回復が掛けられているのかもしれない。確かに、眼病を患ったのは父親一角である。しかし、孝行という観念に囚われている息子もまた一種の盲目といえる。徳目の暴力によって見えなくされている盲目である（観念の盲目性）。

校正を手伝っていた馬琴の息子は、そのせいか眼病を患っていた。後には馬琴自身が眼病となる（「野生、去年中より、つめて著述二取かかり候へバ、右の眼俄二いたミ候事有之」天保五年二月一八日篠斎宛書簡）。いわば作者が作品を模倣してしまうのである。自らの眼病治癒のために子供を犠牲にするなど馬琴は決して考えないであろう。しかし、作品は馬琴の秘かな欲望を語っていたことになる。

荒芽山から吹く風に注目してみよう。「文と叫びて寄来る蚊を、頬に撲て、うるさや、現に夥しき蚊にこそあれ、且燐一燐、と縁類なる、刈草の籠引よする、折から荒芽山の山下風、窓より颯と吹入れて、燈火弗とうち滅したり。莊助これに迷惑して、焔児やあると搔勞れども、今来し俛に案内を知らねば、欲する物は手に当らで、思はず茶碗を拳倒し、又緒車に跌くのみ、ほとほと困じて（中略）せんすべ尽て闇室に、手を叉きて、呆れてをり」（第四七回）。莊助は暗闇のなかでドタバタを演じておりユーモアが感じられるが、ここには盲目の萌芽がある。莊助が一匹の蚊に苦戦していたのに対して、小文吾はたちまち巨大な猪を仕留めるが、対比のユーモアというべきである（5）。

音吾は莊助を迎えるが、ほとんど何の接待もしていない。それに対して、小文吾を迎える船虫の歓待ぶりは際立っている。「今夕饌をまゐらせてん。木枕もそこにあり、足踏伸して休らひ給へ。ここ許は蚊の名ところにて、刺れし迹

の瘡にもなるに、おん管侍は蚊遣火のみ。些鬱悒とも怵給へ」と歓待する（第五二回）。もちろん、これは偽りのものでしかない。「蚊遣火盆は、彼首にあり。亀朶も侍るに焚つけて、燐し給へ」と口にするが船虫はすぐに飛び出す。

ここで、しばらく「文」と飛ぶ蚊に注目してみたい。「八犬伝」における血と煙、蜜と灰のテーマを確認するためである。蚊は血に向かつて、蜜に向かつて進む。それは欲望の世界の手前側を示している。生理的欲求の世界といってもよい（第二七回では盗人が「ほざいたり蚊」と遠ざけられ、第三三回では小文吾が「其処には蚊もあり」と迎え入れられる）。逆に、蚊は煙を嫌い、灰を嫌う。それは欲望の向こう側を示している（第六二回の船虫が扇で払うのが灰である）。この点については後述するが、『八犬伝』とは血と煙の間、蜜と灰の間に広がる人間的欲望の世界である。

越後の挿話では小文吾が眼病になり、盲人に成り済ました船虫がマッサージをしている。「小文吾が眼病にて、物を見ることの得ならぬよしさへ、旅舎の噂に聞知りて、既に十二分の喜悅あり」と語られるのが船虫である（第七五回）。この点についても後述するが、盲目について書き続けた馬琴は、自ら盲目となることで作品に復讐されるわけである（道節が偽りの「眼代」となる挿話も興味深い）。

第八二回で「通愛たき玉児の由来、その趣は異なれども、その奇は自他皆異ならず。亦是不思議といひつべき。玉の文字を名に命ぜしは、俺們も亦余なれど、和君と三名のみにはあらず、（中略）這四名も忠孝仁信、各玉の文字を取りたり」と毛野は語っている。これは、玉の文字と玉の童子がびつたりと重なる瞬間であろう。玉字＝玉児という等式が成り立つからである。

ところで、仁義礼智忠信孝悌の徳目はいずれも、兄弟愛を支えるものにほかならない。親への孝行は兄弟愛と抵触しかねないが、兄弟愛を基礎づけるものとされている（孝は百行の基にして、必後にすべからず。忠信仁義も孝よりして、移して広く行べし」第八二回）。

徳目の世界を兄弟愛の領域と呼ぶとすれば、そこから排除されるものがあるだろう。すなわち、女たちである。優先順位では「兄弟ありて妻子あり」となる。玉梓、亀篠、船虫、妙椿が排除されることはいうまでもない。しかし、浜路、沼蘭、雛衣もまた排除されるのである。女たちは孝の名のもとに暴力的に排除されるだけではない、兄弟愛か

らも排除されている。信乃と莊助の同性同士の強い絆が浜路を排除し、信乃と房八の同性同士の強い絆が沼蘭を排除し、大角と現八の同性同士の強い絆が雛衣を排除しているからである。浜路、沼蘭、雛衣は命を奪われる。妙真、音、曳手、単節は命を奪われはしないけれども、忠の暴力に巻き込まれることになる。徳目の世界において女子であることは不孝を意味する。

曲亭主人自評して云、大約犬士の妻子眷属たるもの、浜路、沼蘭、雛衣、曳手、単節等は、貞操心烈よのつねに捷れしも、咸薄命にして、夫婦階老に至らず。これらも所以ある事なるを、ここには解尽しかたかり。全輯結局の段に迫て、看官冰解するよしあらん。

(第六九回)

女性たちが薄命であることを馬琴は弁解している。排除されたとしても、最後に救済されることを想定しているのであろう。しかしながら、女性が力を発揮するのは、実は馬琴が思つてもみなかつた形においてである。ほかならぬ女性が盲目になった馬琴を手助けするのであり、そこに女性の思いがけない力をみるべきなのである。

沼蘭、雛衣、曳手、単節の四婦人は、各々良人に斉眉く日の、久しきにあらねども、既に鴛鴦の襖を襲て、瀋楊の睦み空しからず。只浜路のみ余らず。赤縄足に繋ぐといへども、合巻いまだ整はず、身は悪棍に傷殺せられて、箕箒を冥府に執るに由なし。誰かこれを憐ざらん。かかるゆゑに、別の一個の浜路ありて、更に信乃と匹配す。便是二女一体、冤鬼陽人異なれども、前身後身一般の如し。この処作者一段の工緻にして初より意中に包蔵す。

(第六九回)

作者は余裕綽々で、亡霊の復活を制御しているようにみえる。しかし、制御不能となるのが亡霊というものである。この後に無許可版への抗議が続く。「予が著したる草紙物語の、ふりて二三十年に及べるは、その刻板若干亡失て、全からざる故をもて、久しく刷出さざるあり。さる板どもを、あなぐり索て補刻するもの、予に校訂を乞ずして、恣に有像を易、文を衍脱して、再刷すと聞えたり」。第六九回の末尾で馬琴は、女性と出版という手に負えないもの二つに言及していたことになる。両者はともに制御不能の側面を備えているのである。

注

〔一〕『二十四孝』にみられるのは観念の暴力であり、だから西鶴は『二十四不孝』でそれを皮肉らずにはいられないのである。馬琴の『青砥藤網模綾案後集』四に「孝

子は自らもて孝とせず、人これを称して孝といふ」とあるが、他者の評価にさらされる孝は、それゆえ暴力に行き着くといえる。

〔2〕番作と亀條の対立関係には、馬琴夫婦の関係を見て取ることができる。いずれも、収入を支えているのは年長の女のほうであり、男は無職といつてよいからである。女のほうが優位にあるので、男には鬱屈と反発があり、それが自らの正当性への主張へと繋がるのだろう。馬琴は「百年以後の知音を俟べく」と希望を托しているが、興味深いことに、そこには馬琴の妻の名が含まれているのである。赤岩百中の偽名には妻に苦しめられた記憶が込められているのかもしれない。「母うへに、勸解言告て、百年の、おん寿を願ふのみ」という伏姫の言葉も注意される（第一三回）。

〔3〕馬琴と牧之の関係について詳しくは、高橋実『北越雪譜の思想』（越書房、一九八一年）を参照。

〔4〕『吾佛乃記』は死者と負債の記録であり、『馬琴日記』は手紙と使者と負債の記録である（『書状』や『使札』や『受取』が記されている）。それらを読むと、馬琴にとって書くことが家族の死を悼む喪の作業であり、家の存続の実現であり、日々の労働であることがわかる。馬琴の自伝と作品の関係については、濱田啓介『吾佛乃記』の世界と『南総里見八犬伝』（近世小説・営為と様式に関する私見）京都大学学術出版会、一九九三年）や高田衛『還酒馬琴』（ミネルヴァ書房、二〇〇六年）を参照。また、馬琴にみられる郷土の意識については内田保廣『馬琴と郷土』（『国語と国文学』一九七八年一月号）を参照。

〔5〕猪退治や花咲か爺など『八犬伝』と宮崎駿『もののけ姫』には影響関係が見て取れる。遺骨を火葬にしたときの灰がかかったために息子の命が縮まったのではないかと馬琴は後悔しているが（後の為の記）、灰によつて新たな生命を盛り立てようとするのが花咲か爺の役割であろう。だからこそ、馬琴は花咲か爺を親兵衛に添わせるのである。なお、『美少年録』における文明的な火と破壊的な火の対立について論じた拙稿「近世説美少年録を読む」（『沖縄国際大学日本語日本文学研究』二六、二〇一〇年）も参照されたい。馬琴は自らの失明を「火氣」のせいとしている（『回外刺筆』）。

## 五 自滅する船虫——欲望と記号

船虫は三度、夫を変えている。一度目は並四郎の妻であり、二度目は大角の後妻であり、三度目は酒顛二の後妻である。阿佐谷、下野、越後と三度、場所を変えている。後妻の論理と呼んでみたいが、船虫はどんな男とも結びつくのである。起源の純粋性や一体性を破壊する欲望の代補性を有しているといつてもよい。船虫が男といつしよになるのは「商量」によつてである。「商量」し、たちまち意気投合してしまう（第七五回）。

「船虫」の用字に拘泥していえば、公を蝕む存在である。「君は船なり、臣は水なり」とあり船は君主のシンボルだ



が(第五六回)、『八犬伝』のいたるところに現れて船を蝕みかねない。「水と船の反覆」は『八犬伝』の主題ともいえる。船の停泊地である柴浜は船虫の最期にふさわしい場所であろう。「柴浜に船果にけり」の一句がそのことを示唆している(第一五八回)。

船虫の特性は巧言令色という点にある。「巧言利口、舌に任して」と現八は指摘している(第六六回)。小文吾を誘うところ、大角を誘うところなどみてきたが、さらに言葉巧みに男を誘うところに注目してみよう。「身は雪窟に陥りて、出んとするに手かかりなければ、心いよいよ驚憂ひて、人の扶助を俟つものから、日の暮れば往還も絶て、声喚嗟せし二响許、悲しさ限りあらざりき。いかで霎時のおん手を勞して、扶揚させ給かし」(第七四回)。

こう語つて人の善意に付け込み、善意の手を死の穴に引きずり込むのが船虫の手口なのである。小文吾に捕まつた船虫は「奄身女流にあなれども、那籠山が往方を索ねて、良人の怨を復んずと思ひ決し」と「巧言虚談」を並べ、夫のために仇討ちをしようとする妻を演じている。「女按摩に形状を変て、盲目と見せ」た船虫は仮装の人でもある。庚申堂の天井に吊り下げられた船虫は「主なる人の早晩に、薄情や賤妾に眷想して(中略)冤屈の罪に、屠所の羊となりにたり」と偽りを並べ、莊助に助けを求めている(「1」)。

酒顛二は「武家の主用に路を急ぐ」飛脚を狙っていた男だが、「十字街妓に、なりつつ客を誘ふて、殺して金を奪ふ」船虫は、金を運ぶ飛脚を取り込む吸血性の蜘蛛といえる(第九〇回)。「三たび盗賊の、妻になりたる」女であつて、盗賊からさらに盗んでもいる。

船虫の正体とは何か。一言でいえば、それは言葉の執拗さそのものである。船虫はたえず弁解の言葉を口にする。「こは理不尽なり何ものぞ」と問われると、「いと恥しく侍れども」と弁解している。「管待態の大かたならで、舌を吸せつ、吸よせて、噬殺さんとせしにて知りぬ。世に多からぬ賊婦なり。俺は是五十子の、放免善悪平なるを知らずや」と責められると、「奴家いかでかさる悪事を、醸するもので侍らんや。思はず佳境に入りしより、おん身の舌の糸断菌に、障たりけん、そは怪我也」と反論している(玉梓の「菌」とも響き合う)。その言葉は、舌の吸引のように執拗なのである。執拗な言葉の前には善悪を司る存在も敗北しかねない。執拗に書くことを促すという点では作家にとって女神である。

盗まれた牛を探しに來た男に対しても、船虫は堂々としている。「否、然る人は見えざりき。去向の路の違ひしならん。快々外を索ね給へ」と嘘をつき、「そは宣することながら、猫敷鼠であるならば、目に掛ざることもありなん。最大なる牛の、牽れて這頭へ來たらんに、誰か目外し侍るべき」と反論し、男は「恚いはるれば術もなし、なほ又外を涉獵るべし。益なかりき」と呟くほかない。牛の存在が発覺すると、男はたちまち殺されてしまう。味方であるはずの酒顛二や媼内を詰るのも船虫である。

嘘、言い訳、言い逃れ、つまり言葉による執拗な弁解が船虫の正体なのである。犬士に罪状を責められると、「犬村主、この年來、奴家がなしし罪過の、後悔及びがたけれども、母といはれ子と唱へたる、好を忘れ給はずは、命乞して給ひぬかし」と言い逃れを口にする。だから、「這期に及びて、議論は要なし」と信乃は遮る。そして、牛による処刑が提案される。「村人們が主の名を、おはしてこれを牛鬼と、喚做けんも名詮自性、牛頭馬頭冥府の獄卒に、擬すべかりける自然の妙契、畜生也ともころあらば、這義を思ふて主の仇なる、賊夫賊婦を劈けかし」と信乃は語っている。

名詮自性とはテクストの論理のことであり、事態の推移がそれによつて説得される。欲望と記号を繋ぎ止める「栓」のレトリックが名詮自性なのである。この後続く残酷で執拗な処刑は、船虫の言葉の執拗さに見合うものとなつていく。「長尖れる角をもて、腋下より肩尖まで、串き劈く怒牛の勢ひ、地獄の呵責を目前に、受て苦む船虫媼内、眼血走る顔の色、赤くなり又蒼くなりて、腹に波うつ大叫喚、串ること数番にて、やうやくに息絶しかば、有繋に勇む六犬士も、這光景に肅然と、思はずも目を合しけり」。船虫はいわば栓をされ、豊穰の角と一体になるのである〔2〕。

船虫の言い逃れをさらにみておこう。「きかぬ夫のしぶとさを、疎ましとのみ思へども、思ふに任せぬ女子の悲しさ」と責任を並四郎に転嫁し（第五二回）、「今さら後悔その詮なけれど、世に女子と生れたるものの、好も歹も夫の爲に、心を用ひぬ事のなければ、夫の指揮に已ことを、得ざりしよしを猜し給へ」と偽一角との関係を弁解している（第六六回）。現八は冷笑し「夫の爲に謀るとも、悪事と知らば諫めもすべきに、残忍邪慳を事として、夫に忠ある貞女といはんや」と叱り付けているが、言いようによつては船虫も「夫に忠ある貞女」なのである（この場面で船虫以上の言い逃れを口にはしているのは籠山逸東太のほうである）。

船虫は玉梓の怨霊の後身といつてよいが、言葉の執拗さこそ怨霊の正体ではないだろうか。言葉の執拗さを前にと、善悪の判断も揺らいでしまうのである。「いはるる所こころ得がたし。女はよろづあはあはしくて、三界に家なきもの、夫の家を家とすなれば、百年の苦も楽も、他人によるとはいはずや」(第六回)。この玉梓の弁解はほとんど船虫の弁解に等しい。「男女の差かはれども、むかしは共に神餘の家に仕給ひし八郎ぬし。旧好はかかる時、執なしして給ひぬ」と玉梓は孝吉に語っていた。言葉の執拗さが馬琴においては女性という形をとって現われる。言葉の執拗さを体现するのが女という記号なのである。興味深いのは、伏姫や親兵衛が船虫と接点をもたない点である。あたかも地上の汚れを避けるかのように、船虫が退場してから、伏姫や親兵衛は再登場してくるのである(船虫処刑に立ち会ったのは六犬士であり、毛野と親兵衛はいない)。神童は言葉の行き違い、言葉の執拗さとは無縁の存在といえる。この後の『八犬伝』が退屈だとすれば、それは言葉の執拗さが消えてしまうからであろう。

船虫が「旧の良人は故ありて、世をはやうし侍りしかば、わらはは処々に流浪して、好に就、歹に就き、思ひ出さぬ日はなきに、見れば見る随よく似給ひし、おん身に情願あり。そをうけ引せ給はんや」と誘い、色仕掛けで籠絡していたのは籠山逸東太こと縁連である(第六七回)。船虫の自滅の直後、毛野はその縁連を討ち取ることになる。

「那縁連は、千葉家の旧臣、籠山逸東太と喚れし折、馬加常武に哄誘され、千葉家の忠臣粟飯原首を、杉戸の松原にて詐欺り害して、逐電して下野に世を潜び、那首の妖人、仮赤岩一角が徒弟となりて、その大刀筋を受しより、仮一角の吹拳により、長尾景春主に仕へしに、亦復犯せる罪ありて、亡命して当家に来れり」(第九二回)。このように語られた亡命者が「縁連」であり、様々な縁と連に繋がっているが、その執拗さは船虫に匹敵する。「妻は三人まで娶りしかども、或は一ト年、或は半年、添ふや添ずに身まかりて、只一トはしらの子尚なし」という設定などは船虫と瓜二つである(第六七回)。したがって、船虫が自滅した直後に、縁連が討ち取られてしまうのも偶然ではないだろう。

注

〔一〕「獄卒等は八重括せし、額蔵が索の端を、棟の枝に投かけて、力に任して釣掲れば、足は條忽に地をはなれて、六尺あまり引登されたる、背は幹を負るが如し」(第四三回)。こうして吊り上げられた莊助が、同じく吊り上げられた船虫を助けることになるのは必然ともいえる。

〔二〕文政一〇年二月三日、篠斎宛書簡に「毛野が仇討の爲体に、大記が妻娘に自滅ヲさせ候て、毛野に殺させず。こころ、不及ながら、作者の用心に候」とあつ

て、馬琴は手を下す場合と自滅する場合を区別しているが、畜類に殺される船虫は自滅に相当する。船虫の自滅とは、自ら舌を噛んで死ぬようなものである。人を殺そうとする女は大地母神の相貌をみせるが、『三国一夜物語』の卯原、『椿説弓張月』の阿公、『八六伝』の船虫はそうした系列に属する。

## 六 第八番目の法則——作品と隠微

第九輯中帙附言で馬琴は稗史に関して名高い七つの法則を説いている。「唐山元明の才子等が作れる稗史には、おのづから法則あり。所謂法則は、一に主客、二に伏線、三に襯染、四に照応、五に反対、六に省筆、七に隠微即是のみ」。そして「主客は、此間の能業にいふシテワキの如し。その書に一部の主客あり、又一回毎に主客ありて、主も亦客になることあり、客も亦主にならざることを得ず」と説明する。

主客はそのままとして、しかし、他はもつと簡略化しうるのではないだろうか。伏線と襯染は一つにまとめることができる。いずれも、前もつて準備しておくことだからである。ただし馬琴の理解では、伏線と襯染が区別される。「伏線と襯染は、その事相似て同じからず。所云伏線は、後に必出すべき趣向あるを、数回以前に、些墨打をして置く事也。又襯染は下染にて、此間にいふしこみの事也」。線的なものの準備と面的なものの準備が区別されているようである。

照応と反対も一つにまとめることができる。いずれも、複数の挿話が対応し合うことだからである。ただし馬琴の理解では、照応と反対が区別される。「照応は、照対ともいふ」、「照対は、故意前の趣向に對を取て、彼と此とを照らす也」、「反対は、照対と相似て同じからず。照対は、牛をもて牛に對するが如し。その物は同じけれども、その事は同じからず。又反対は、その人は同じけれども、その事は同じからず」。

省筆と隠微も一つにまとめることができる。いずれも、文外の意味を表すからである。ただし馬琴の理解では、すぐに判明する文外の意味と判明に百年の時間を要する文外の「深意」が区別される。前者が省筆であり、後者が隠微である。「省筆は、事の長きを、後に重ていはざらん為に、必聞かで称ぬ人に、偷聞させて筆を省き、或は地の詞をもてせずして、その人の口中より、説出すをもて脩からず。作者の筆を省くが為に、看官も亦倦ざるなり、又隠微は、

作者の文外に深意あり。百年の後知音を俟て、是を悟らしめんとす。

こうして稗史七則は稗史四則に簡略化できるだろう。しかしながら、『八犬伝』である以上、あくまでも「八」に拘って、稗史八則を考案してみるべきかもしれない。すると、隠微は二つに分割できるように思われる。とりあえず主観的隠微と客観的隠微、作者の隠微と作品の隠微を区別してみたいが、前者は作者が主観的に意図した隠微のことである。後者はテクストの構造とコンテクストの構造によって規定された隠微のことである（「1」）。

いくら作者に意図したいことがあっても、テクストの構造に即していなければ、それは伝わらない。また同時代のコンテクストに即していなければ、伝わらないはずである（当て込みも不発に終わるだろう）。むしろ、テクストの構造や同時代のコンテクストが作者の意図を裏切って、作者の意図した以上のことを語らせてしまうのである。それが客観的隠微であり、作品の隠微である。作者が意図した以上のことを語ってしまうところに、作品の恐ろしさがあり、作品の歓びがあるだろう。「主客は、此間の能楽にいふシテワキの如し」とした馬琴の定義を活用するならば、主観的隠微は作品におけるシテ、客観的隠微は作品におけるワキということになるかもしれない（前者が頭の中にある観念論的意図に留まるのに対して、後者は作品として具体化された唯物論的強度を備えている）。

本稿が探ろうとしているのは、もっぱら後者の客観的隠微のほうである。神隠しの後に八番目の犬士が現われたように、八番目の法則として客観的隠微を浮上させること、それが本稿の課題にほかならない。親兵衛出現の巻に付された「附言」は、言外に八番目の法則の出現を促しているように思われる（「2」）。テクストが必ずテクストの余白を生み出してしまうとすれば、この法則自体が余白の次元にもう一つの「隠微」を生み出すのである。いわば文外の文である（隠微を人物化したのが伏姫、すなわち伏せて秘めるものであろう）。

天保三年五月中浣、篠斎宛ての書簡は、『水滸伝』に「三箇の隠微あり」と記している。「三箇の隠微ハ、当時出現の妖魔は、一百一十ある事、又洪信と王進ハ便是前後身、王進と史進とは子弟一体なりし事、又宋江等百八人に、初善・中惡・後忠の三等ある事、即是也」。これによれば、隠微はいずれも作品構造にかかわるものといえる。天保三年二月七日、桂窓宛て書簡では舩虫の死に言及している。「作者の用心ハ、上帙の闘牛の照応に、ここにて牛の角にて突殺するが大趣向にて、その余の事ハ、潤色の筆に成りし也。牛裂せずして、角もて突殺させしにて、闘牛の照応

なるをしるべし。且磔ハ、画くことも、ものにかくことも禁忌也。故に牛の角にて磔の姿を見せたる也」。鬪牛には牧之との交渉の記憶が付きまといっている。しかも、キリスト教の禁止が反響している。こうした作品外の事態まで含めて隠微というべきなのである。

「誰か作者の腹稿を、詳に探り得て、未発の後回を知れる者ぞ。茲に唯その一人あり、仰ぎて造化の小児に問ふべし。呵々」(第一一五回)。このように記す馬琴の筆を導いているのは「小児」だが、それは非人間的な造化の力であろう。

第九輯中帙末尾には刊行者による注記という形で、馬琴の息子が亡くなったことが記されている。「次の日五月八日の朝、翁の独子にて侍りける、琴嶺先生の計聞えて、長き病著起つよしもなく、この朝辰時に、簀を替にき、と告られけり」(第一一五回)。八番目の日である。親兵衛が再登場してきた第九輯中帙の途中で、馬琴は息子を奪われるのである。とすれば、子供を与えるものと奪うものは同じ一つの力ではないだろうか。「得失は天に在り、人のよく作す所にあらず」とあるが(第一七〇回)、いわば神的な力である。神的暴力といってもよいだろう。玉梓の呪いによって家が断絶しかねない、しかし、そんな逆境において希望もまた生れてくるはずである。姥雪代四郎に関する第一三二回の題目を借りていえば、「望を失て反て望を遂ぐ」というのが馬琴の発想だからである。

隠微は、たとえば玉梓の亡霊として、毛野の仮装として、親兵衛の神的力として発現する。本稿はそこに焦点を当てようとしているが、もはや作者の主観的な隠微を探るレヴェルにとどまることはできない。全一八〇回終結の後、馬琴は「知吾者、其唯八犬伝歟。不知吾者、其唯八犬伝歟」と記すことになる(第九輯下帙下套之中)。作者を知っていれば作品もわかる、しかし作者を知らなくても作品がわかるということであろう。『八犬伝』は作者とともにある、しかし作者を離れてもいるのである。

『吾仏の記』四によれば、馬琴は歌川国貞に肖像画を描いてもらったようだが、老眼のため見るができなかった。子供たちに見てもらおうと、「実に趣きはあるに似たれども、さはばかり肖たりとは見えず」という答えであった。もちろん、肖像画に描かれているのは馬琴自身である。しかし、馬琴自身であろうが馬琴が所有しているものであろうが、絵師の手を借りなければ具体化できないのである。しかも、それを確認するために家族の手助けを必要とする。この

挿話は、馬琴の作品構造について考えるとき大きな示唆を与えてくれるように思われる。実は馬琴自身も、自らの意図、自らの隠微を知ることができないのである。自らの姿を見ることができず、ただ他者の言葉を介して確認するだけの存在が馬琴だからである。人は誰もが自分自身に関して盲目であるほかないともいえる。おそらく、馬琴は他者の言葉を通してしか知ることのできない何かを書き綴っている。

注

〔1〕隠微については高田衛『八犬伝の世界』（ちくま学芸文庫、二〇〇五年）、徳田武『日本近世文学と中国小説』（青裳堂書店、一九八七年）で論じられている。しかし、本稿が探ろうとするのは作者の主観的な意図としての隠微ではない。作者にとつてさえ不可知で、時代とともに変化することその真の隠微であろう。なぜなら、テクストは必ずその余白を生み出すからである。時代とともに変化する余白を固定化することは誰にもできないが、そこに作品の創造性がある。「譬ば象棋の起馬の如し。敵の馬を略るときは、その馬をもて彼を攻、我馬を喪へば、我馬をもて苦しめらる。変化安にぞ疆りあらん」というのがテクストの状態にほかならない。

〔2〕『侠客伝四續評』の馬琴答書には「抑件の法則は、一に主客、二に伏線、三に照応、四に返対、五に襯染、六に重複是也」とあり六法則だが、その後、一法則増えたことになる。文化九年の台巻巻末の刊行予告に「里見七犬士」とあり七犬士だが、その後、一人増えたことになる（この点については、石川秀巳『南総里見八犬伝 初期構想の成立』『国際文化研究科論集』一七、二〇〇九年を参照）。七法則が八法則に増えてもおかしくはない。

## 七 王権と資本——遍歴・予兆・策略

第九七回から始まった墓田素藤の物語は、里見義実の物語を反復するものとなっている。いずれも、支配の起源、王権の起源を語っているからである〔1〕。義実と素藤は対照的な存在にみえるが、悪政を正すために挙兵するという点で共通している。女性のせいで国を乱すかどうかという点で異なるにすぎない（墓田には墓六の名前が響く）。『悪政非道の所以とかいへば、我那民の病疫を、救ふて恩を施さば、必我を徳として、竟に羽翼となることあらん。人望我に傾く時は、那如満を推仆して、我館山の城主とならん』（第九九回）、こうした素藤の野心は義実とも無縁ではないだろう。かつて義実は「乞食したる浮浪人、白浜へ漂着して、愚民を惑し、土地を奪ひ、両郡の主となりし」と罵

られていたからである（第八回）。

「神餘は当初、かんのあまりと唱へしを、後世かなまりと略称し、後又字音の便利に儘して、じんよしも喚做たり。然ば金碗は神餘にて、又金鞠に作るもあり、共に神餘の仮名なれば、同宗たるを知るに足れり」と義実は、大法師に語っている（第一三二回）。安房国の領主となった里見義実はいわば王権を篡奪している。しかし、旧主の神餘氏を受け継いでいるのが金碗氏だという論理によつて、その事態を正当化するのである。

素藤出世の契機は次のように語られる。

素藤は憶はずも、怪物のうち相譚ひし、その事の趣を、現ともなく聞果て、且驚き且怪みたる、肚裏に思ふやう、「今宵外面より来ぬる物の、玉面嬢と喚かけて、問答に及びしは、世にいふ疫鬼ならん。又玉面嬢と喚れしは、則是木精にて、那樟樹の精霊にやあらん。聞くが如きは這地の民の、今時ならぬ病疫は、城主小鞠谷如満の、悪政非道の所以とかいへば、我那民の病疫を、救ふて恩を施さば、必我を徳として、竟に羽翼となることあらん……」

（第九九回）

遍歴していた素藤はたまたま疫病神の会話を耳にし、それを契機として策略を用いついに城主となる。これは義実の出世譚とよく似ている。遍歴していた義実もまた予兆に導かれ、策略を用い城主となったからである（この場面に登場する玉面嬢の呼称が、玉梓に似ているのは見逃せない）。

素藤の策略というのは黄金にかかわるものである。「病着既に瘥たる者は、樹に登り神水を汲拿て、全村に配分せよ。そが中に貧くて、飢渴に及ぶ者あらば、我予、樹の虚に措く処の、円金一枚を貸すべきぞ」と触れ回る。樹木の洞の黄金水は天然の蜜にみえるが、結果として素藤は資産家となるだろう。「素藤貨殖の人ならねども、土農工商尊信して、東西を餽るも多く、借財も期を違へず、返さざるものなかりしかば、才に一念許の程に、村に一十二の富家となりぬ」。利殖によつて資本は増加する。ここには王権の起源とともに、資本主義の宗教的起源を見て取ることができる。神仏を味方につけることで資本は強固なものとなつていくからである（二）。王権とは宗教によつて資本を倍化したものにほかならない（素藤は諏訪神社の神主となり、また援助もする）。

義実の物語に手紙が介入していたように、素藤の物語でも手紙が奇妙な役割を果たす。それは盗まれた手紙である



にもかかわらず、宛先に届いてしまうというものである。「有一日又熊谷の曠野にて、武家の飛脚にやあらん、独ゆく旅客を引挟み听仆して、そが懷なる路纏を略るに、金は三十余両あり、又竹箆に収めたる、書翰ありしを引出して、共侶に關するに、思ひがけなき素藤が、願八盆作に与る密書にて……」（第一〇〇回）。この密書で願八と盆作は素藤の家臣となり、奢侈を極める。美食の大盤振る舞いであり、騒乱状態といつてよい。

だが、奢侈のせいであろうか、黄金水まで枯渇してしまふ（「神水は、一滴も候はず」）。そこに現れるのが妖尼の妙椿であり、煙によつて幻術を行う。「素藤は魂浮れ、心蕩けて狂ふが像く、美人の側へ衝と寄せて、抱き住めんとせし程に、手には拿られぬ煙と共に、形は滅てなかりけり」。いわば資本が枯渇したとき、頼るのが幻術ということになる（天然の蜜から煙へ）。ここで興味深いのは、火遁の術で軍資金を集めていた道節が、そうした妖術を捨ててしまふ点である。『美少年録』の鍊金術も蜜を作り出そうとして灰に終わつていた。

素藤の軍師となる妖尼の名前は、親兵衛の祖母の名前と対比するべきものであろう。妙真と妙椿は対照的な存在に見えるが、男を庇護する女性という点で共通している。男を惑わし国を乱すかどうかという点で異なるにすぎないのである（ここには月世界のごとく墓田と兎菰が出てくるので、妙椿は仙葉を盗んだ姫娥に相当する）。

妙椿の幻術に惑わされた素藤は浜路姫を略奪するが、親兵衛が奪い返す。注目されるのは、親兵衛と浜路姫の關係が手紙を契機として、里見義成に誤解されてしまふ点である。「提燭の火光に、照してつらつらと見給ふに、是則艶書也」（第一一〇回）。義成は「我拾ひし那艶翰も、亦その艶翰と異ならで、実は素椿なりけんを、封も折かで焼棄たれば、疑念を解くよしなかりし」と振り返っている（第一一四回）。

これこそ手紙の怨霊的效果ではないだろうか。たとえ白紙であつても、何かが書き込まれていると思ひ込んだとき、ありもしないものが効力を發揮するのである。しかしながら、浜路と親兵衛は絶対にありえない關係である。浜路姫にとつては信乃への裏切りであり、親兵衛にとつては伏姫への裏切りを意味するからである。

第一一回に「墓田の隊兵なるに、主の家号に相似たる、蛙を食としたる事、實に是獅子心中の、虫に等しき者とやいはん。名詮自性思ふべし」とあるが、このとき、すでに素藤の自滅は決定的であろう。第一二一回では素藤を操る妙春が、八房を育てた牝狸であつたことが判明する。玉梓の怨霊効果がここまで及んでいるのである。「件の妖尼

妙椿は、むかし八房の犬を孚みける、安房の富山の牝狸なれば、那毒婦玉梓が、余怨その身に残るをもて、国主御父子を恨みまつりて、素藤を哄誘し、遂に両度の兵乱を、起して今日に至れる也」(第二二一回)。牝狸の乳はいわば天然の蜜である。

この後、「自然と文字になれるならん」と続くが、「余怨」は光を受け文字になることによつて消えたという。しかし、「余怨」が完全に消えるとは思われない。言葉の行き違いは、いつでもどこでも起こりうるものだからである。この後は、徳用という僧が嫉妬を募らせ、混乱をもたらすことになる。

文明一五年四月一六日、結城の古戦場で里見家のために大法会が催される。興味深いのは、それが素藤の行為とよく似ている点である。ともに民衆への施行を行っている。

伴当們に受拿して、経紀児をかへし去らしめ、施行は人別に、米一舛と錢百文と相定めて、伴当們によしを示し、この日の為に準備したる、白麻の幕七八張を、大庵の檐下より、真直に供養塔の頭まで、左右なる樹木を片拿て、透間もなく張亘し、且両道の席幾枚敷、長くその中央に布しなどして、準備遺なく整ひしかば、八個の夥兵は、身甲に、各々脇盾臙甲なる、手に手に捍棒を衝立て、分れて非常を警めたり。(第二二四回)

法会はもちろん仏事だが、実は経済行為という側面をもつ。素藤と義実を分かつのは、徳を備えた作法に則っているかどうかであろう。さらにいえば、法会は軍事力に支えられており、宗教的、経済的、軍事的営みなのである。したがって法会は、里見家による王権の確立を意味しているといつてよい(この法会を乱そうとするのが徳用である)。王権の確立は、馬琴の作家としての自立と相同的だとみなすことができる。馬琴にとって作家としての自立は滝沢家の確立と不可分であろう。王権の確立に経済的要素が必要のように、作家の自立にも経済的要素は不可欠である。馬琴の場合、作家的自立のうえで上方旅行が重要であったことが指摘されているが、その際、馬琴は京伝の書画を元手としてつた旅したという(3)。

京に滞在した現八は、「都の手態はさすがに愛たし。されば文学武藝の師の、門戸を張るもの里巷に多かり」と感心し、「限りある路費をもて、限りしられぬ旅寝をせんに、遠謀なくは後悔あらん」と考えているが(第五九回)、それは上方旅行をした馬琴の感想でもあろう。作者として苦心を記す馬琴が、執筆の苦難を旅行にたとえている点に注目

しておきたい。

抑和漢、稗説に遊ぶ諸才子、新を出し奇を呈して、看官の愛憎ぶ条は、作者もおのづから筆找み、又話説平和にて、看官のすさめぬ条は、作者難義の文場也。遮莫是等の平話なければ、新奇も倒に綴るに由なし。是を旅ゆく人に譬へば、名勝旧迹、山水佳景は、疇も観まく欲すれども、平和の駅路、險阻の山海、いくばく里か歴るにあらずは、名勝旧迹奇絶の佳景に、遊ぶことなかるべし。

(第一三〇回)

作家として自立するために馬琴には上方旅行が必要であった。したがって、馬琴の息子も親兵衛も上方をめざさなければならぬ。馬琴の息子は医師になるべく剃髪した翌々年、伊勢に参宮している。なぜ親兵衛に上方旅行が必要かは明らかであろう。親兵衛の上方旅行は自立のためのインシエーションになっている。たとえば水戯の試練だが、「親兵衛が身は瓢の像く、入れられても波上に、浮出てのみありければ、幸ひにして死ざるのみ、正に一期の大厄難、最も危き角ひなり」(第一三三回)、この点については後述したい。

随筆『羈旅漫録』によれば、馬琴は「江州の大水」や「淀の洪水」を体験している(三三、八七、一二四)。

紀の国高野山にまうづべき志かねてありぬるを、この洪水にへだてられて、つひにゆかずなりぬ。

(日本随筆大成『羈旅漫録』三三)

洪水のせいで高野山詣はかなわなかった。したがって、それが『俠客伝』の姑摩姫の願望となるのかもしれない。三河の吉田については次のように記している。

土地の婦人はかならずしも美ならず。商家の街妻などを見れば、黒暗天女の如し。

(『羈旅漫録』一九)

表面的な美醜にかかわるものではないが、黒暗天女は馬琴の読本に不可欠の存在である(『美少年録』の天女、玉梓、船虫、妙椿など)。天保二年八月二六日、篠斎宛書簡で「上方の板元二八、『巡島記』二て懲り候処、此度の河茂も右之始末にて、さてさてこまり候」と記しているが、馬琴の上方との関係が親兵衛の試練には投影されているのかもしれない。ちなみに、天保四年五月朔日宛桂窓宛書簡に「悴は野老と宗旨ちがひにて、幼年より弁天を信じ、日々朝夕何を祈り候やら、信心おこたり不申候」とあり、馬琴作品における弁才天の重要性が息子に由来することがわかる(信乃は滝野川の弁才天に祈っていた)。

若き素藤にとつても、上京は修行の旅であつたといえる。親兵衛を危険にさらすのは絵から飛び出した虎であるが、素藤を危険にさらすのは腹から飛び出した声である。「怪むべし、業因が、肚裏に声ありて、忽然として叫ぶこと、応声虫に異ならず、年来他が做しし悪事を、云々と啗る声、高やかにして、人の耳を申く可りに聞えしかば……」（第九七回）。父親の悪事が露見して素藤を危険に陥れるのだが、いずれにおいても、欲望の発露が禍々しく梓から飛び出してくる。そして京都を脱出するのである。

では、親兵衛の海賊退治は何のために必要なのか。それは『八犬伝』が水の物語であり船の物語であることを明示している。海賊たちは親兵衛一行に毒の入った酒を飲ませようとする。

親兵衛は、身辺に措れし體の、冷たる茶碗を拿抗て、喫試んとしぬる折、怪むべし、懷なる、仁字の灵玉おのづから、護身囊を脱出て、拳を托地と撻しかば親兵衛「吐嗟」とばかりに、憶ず茶碗を拿噬せば……（第一三三回）

「這甘酒にも濁酒にも、毒ある故にぞあらんずらん」と推測しているが、この甘美な酒は文字通り媚薬と考えることができるだろう。物語は親兵衛を殺そうとしているのではなく、むしろ親兵衛の欲望を目覚めさせようとしているからである。船上の媚薬、それは親兵衛において欲望を触発する（トリスタンのごとく）。「衆人都て毒酒に仆され、剩この老賊に、おん金一箱窃れしを、透さず扁舟に赶稠て、挑む勢ひに舟覆りて、俱に水中に墜しより、我泳法に疎ければ」と語っているが（第一三三回）、水を怖がり克服しようとする親兵衛に注目してみなければならない。

注

〔一〕素藤と義美の類似性については、石川秀巳『八犬伝』幕田素藤構想の意義（『文芸研究』九九、一九八二年、播本眞一『南総里見八犬伝』の神々）（『八犬伝』馬琴研究）新典社、二〇一〇年）を参照。播本論文は日本神話と比較しつつ『八犬伝』を論じているが、『神曲』との比較において『八犬伝』を読み解くこともできるだろう。『八犬伝』には地獄篇、煉獄篇、天国篇という構成が見て取れるからである。伏姫受難の挿話は地獄篇であり、八犬士冒険の挿話は煉獄篇であり、里見家勝利の挿話は天国篇である。『往生要集』にあるのは厭離穢土と欣求淨土だが、『八犬伝』はその中間に冒険の領域を切り拓いている（ロードムーヴィーのとき中間領域である）。

〔二〕馬琴『常夏草紙』の場合も、資本が利息を生み長者となるのである。もともと資本は盗み取ったものだが、『弁財天の冥助』として供養することで宗教的に隠蔽している。調布の長者が色香に迷うところは素藤に似る。

〔3〕この旅については水野稔『馬琴文学の形成』（『江戸小説論叢』中央公論社、一九七四年）、濱田啓介『羈旅漫録』の旅に於ける狂歌壇的背景について」（『近世小説・営為と様式に関する私見』前掲）などを参照。馬琴は京都の公家から曲亭という姓氏を認可されており、それが姓氏の認可を求める親兵衛の上京に投影されているのであろう。なお、小谷野教『江戸の二重王権』（『新編八犬伝綺想』前掲）は天皇と將軍という權力の二重性について考察しているが、『八犬伝』のいたるところに二重の權力を指摘できるのではないだろうか。それは父権制と母権制の二重性であり、王権と資本の二重性であり、徳目と暴力の二重性である。さらに視覚と聴覚の二重性を指摘できる。われわれは、『八犬伝』を読むとき、いつも文字の視覚性と音声の聴覚性に干渉されるからである。東海道の往來は二重權力を確認することにはならない（そこから『石言遺響』が生み落とされる）。

## 八 絵画と盲目——文外の文

第九輯下套下引で馬琴は自らを知る友人として三人の名を挙げている。「余性也僻。常非同好不交也（中略）遠方有三子在。所謂和歌山篠斎。南海黙老。松阪桂窓是已」。殿村篠斎、木村黙老、小津桂窓、彼らは幸福な文通相手である。とすれば、次の三通などは友人たちへの手紙と響き合うのかもしれない。「両家老、東・荒川へ晋達すべき、呈書一通と、七個の義兄弟へ回翰、又大母妙真を慰る、消息と共に都て三通を、一霎時の程に、写果て……」（第一三六回）。しかし、文通が調和的なものであるとは限らない。鈴木牧之との関係はそれを示しているが、絵師との関係もまた困難なものがあつたといえる。馬琴は冒頭で絵画をめぐる困惑を書き記すこととなる。「本伝出像の人物に、面貌の老たると弱く見ゆると、本文に合ざるあり」として弁じている。「画工と作者の用心の、同じからぬを知るに足らむ歟」。画工と作者は異なる、そのことに馬琴は悩み続けなければならない。この輯で絵師の物語が扱われるのは必然といえる。

第一〇四回で再登場してから、親兵衛は様々なインシエーションの試練を受ける。

然るにても、他は武勇と表裏にて、女にして見まほしき、美少年なるものを、倘我臥房の友と做さば、恩愛はより濃にて、年闌ずとも我股肱の、家臣にならまく願ふべし。我は愛宕の行者にあなれば、敢女色に親します、男色も亦今までは、然ばかり掛念せざりしかども、只是他が与ならば、多年の行法空になるとも、惜むに足らず、悔もせじ。

（第一四〇回）

細川政元が親兵衛に熱く語っているところである。「掛念」に「寝ん」が掛けられているかのようだ。親兵衛は男色の対象となり幽閉されるが、この男色問題が次の挿話へと繋がっていくのである。しかも、幽閉された親兵衛の姿は絵に閉じ込められた虎に等しい（「京に在ること百日許…」とあるが、そこに妻の名が記されてもいる）。

第一四一回から始まる巽夫婦の物語は、馬琴自身の私小説として読むことができる（1）。妻は再婚であり、夫婦は妻の才覚で生活している。夫には何がしかの才能があるが、目が見えなくなる。目を病んだ夫の謹慎生活は、馬琴が理想としたところであろう。目の回復、それは馬琴自身が祈念したところにちがいない。しかし、目が見えるようになると、再び、夫婦の諍いが絶えなくなる。「瞋恚れる面色凄じく、茨の花に刺ある像く、走り蒐りつ良人の胸前、捉へつつ推据ても、堪ぬ喫に敦き暴く…」こうした夫婦の行き違いは馬琴夫婦にも相当する。妻からみれば夫の技芸は「男色」にすぎない。作品量産は馬琴が苦痛としたところであり、作品が高く売れないというのは馬琴の不満でもあらう。

もちろん、絵師と馬琴には相違点がある。「巽は性として、酷く酒を嗜むをもて、飲食の友絶る間なく…」この浪費癖は儉約家の馬琴にはないものである。絵師は浪費の欲望、そして欲望の浪費ゆえに破滅するといつてもよい。

絵師の前に現れた稚児は、「汝が画く十二枝の額は、孰の獣も好と云、人の噂に聞知りて、其を誂ん為に来にけり。予画きし虎ありや」と注文している。動物を得意な題材とするというのは馬琴自身にも当てはまる。稚児の語る絵画論は、馬琴の小説論に重なるものであらう。「約莫生とし活る物は、画くに晴を要緊とす。人に男女あり、貴賤あり、及老幼あり、善悪あり。且喜怒憂楽愛哀苦の七情あり」とあるが、七という数が稗史の法則を連想させもする。馬琴の執筆活動は理論と実践にまたがるものといえる。

「桀紂の衣裳を服て、桀紂の言を行ふ者は、是桀紂也。然ば生平に、馬をのみ画く者、千百幅に至るまで、筆精馬に入るときは、畜生道を免れざるべく…」と続くが、これは動物を題材としていた馬琴自身の懸念かもしれない。描いた虎に殺される絵師の物語は、作品に復讐される作者の不安を表すのであらう。

興味深いことに、絵師の挿話では背後から現れる場面が多用されている。

然ば巽は那行童の、還るを一霎時目送る程に、思ひかけなき後に人あり、「やよ是丈夫」と喚立る、声いと苛めし

かりければ、巽は「吐嗟」と駭きて、急に其方を見かへるに、此は是別人ならず、則老婆於兔子也。

(第一四一回)

夫婦劇しき争ひの、間に分入り推隔て、於兔子が持ちたる刀子を、奪ふて後へ投棄るを、主人夫婦は訝りながら、見れば則別仁ならず、樵夫山幸樵六なり。

(同)

余程に件の行童は、巽が宿所を立去りて、ゆくこといまだ百歩に及ばず、路の這方の冬青樹の、蔭に張ふ一人あり。是則別人ならず、亦那山幸樵六なり。

(第一四二回)

人は背後に目をもたない、それゆえ、人物の盲目性が際立つのである(背後の盲目性)。絵師は稚児といっしよにいて、妻に目を見咎められ、そして画商に見咎められる。しかしながら、妻も画商も絵師と稚児の関係を誤解しているのであつて、一種の盲目性を有しているといえる(主観の盲目性)。妻は絵師と稚児の關係に嫉妬し、画商は稚児を撃とうとして妻のほうを誤射してしまふのである(そこに「百」の散種がみえる)。

その後、政元に強いられて虎の瞳を描いた絵師は、軸から飛び出した虎に殺される。注目されるのは、絵師を破滅へと導いた稚児が神童と呼ばれていることである。「神童の、能弁才幹、耳新なる、来歴古実、今更に、疑ふべくもあらざれば、巽は心驚くまでに、且感じ且悦びて……」。男色の対象と疑われた稚児と男色の対象とされた親兵衛は重なるのである。いずれも天分として才能を有しているからである。したがつて、神童Ⅱ稚児は両義的な存在といえる。神童Ⅱ稚児は幸いをもたらす場合もあれば、災いをもたらす場合もある〔2〕。親兵衛の物語に絵師の挿話が組み込まれているのは、神童の両義性を語るためにちがいない。

神童Ⅱ稚児は人を破滅へと導くのであり、絵師の物語はその例証といえる。「撃れしは那行童ならで、今村長許かへり来にける、於兔子は胸骨打碎れて、鼻よりも口よりも、吐きし鮮血は襟さへ帶さへ、韓紅に染做たる、窮所の銃傷、いかにして、不死の薬も届んや」(第一四二回)、「巽風の、咽を愚煞と嚙締て、振一振れば、散と噴る、鮮血と共に噬断離られし、首は縁頬に輾限て、軀は仰さまに仆れけり」(第一四三回)など描写は鮮烈である。

目が回復すると、逆に災厄を招く。目の回復を祈りつつ目の回復を断念せざるをえない、この逆説こそ馬琴のパラドクスであろう(素藤Ⅱ妙椿の挿話には両眼を洗うと闇夜に物が見える「水」が出ていた)。そして神童のパラドクス

がある。神童が全能を発揮すると、逆に災厄が訪れかねないからである。事実、親兵衛が登場したせいで、地方的な抗争にすぎなかったものが、国家的な規模の抗争に発展してしまうのではないか。里見家は神童のために破滅するといえなくもない。「国家將に興らんとすれば、禎祥あり、国家將に亡んとすれば、妖孽あり」と語られるが（第一五〇回）、虎の登場とともに国家の問題が浮上してくる。「苛政は虎よりも猛し」というわけである。

絵師が虎の絵に瞳を描いたために、虎は絵から飛び出してしまった。したがって絵画とは、そこから飛び出すかどうかという枠の問題である（3）。それは親兵衛を枠に収めることも関連しているのだが（実際、親兵衛は幽閉され閑所の通過を禁止されていた）、ここでは絵と文の関係について考えてみよう。次の一節に注目しておきたい。

この巻の画像の中、金碗大輔孝徳が、川を渉す図のごときは、文外の画、画中の文也。この画像によらざれば、忽然として霧の晴るるゆゑを知るよしなし（第一四回）

「文外の画、画中の文」とは奇妙な表現である。文の外に画があるけれども、画の中に文があるというのは、エッセイ的でメビウスの輪のような状態であろう。外と内が通じ合っているからである。瞳を点すれば、枠の内に収めることができないし、瞳を失えば、枠の外に出ることができない。これが馬琴のパラドクスである。『八大伝』末尾からは「回外剩筆」が飛び出ているが、枠の内に留まる力と枠の外に飛び出す力が、馬琴においては闘ぎ合っているのである。

文と画は必ずずれてしまう。馬琴は文と画の齟齬を気にしているが、そこから浮上してくるのは時間の問題である。時間とは文と画の齟齬のことだといってもよい。

予ては発端のみにして、八土のうへは定かならぬに、書肆が責を塞んとて、稿本はまだ其処へ至らず、すぢすらいまだ考起さで、無心にしてまづ画をあつらへ、後に其画にあはしつづ、作りなしたところもあれど、緯大かたはたがへるものなし。（第二輯再識）

使女の急訟に、柏田梭織を写し出すに、その在処を先にして、その来る所を後にせり。首尾錯乱に似たれ共、さにあらず。其人の小伝来歴、後に僅にその人の口中より説出すをば、事を先にして伝を後にす。画も亦是に従ふものなり。しかはあれど、画匠は只その画を画として、その意を意とし得ざることあり。ここをもて作意と岩齧



なきにあらず。

(第一四回)

文が先にあつて、後から画が追いつくこともあれば、画が先にあつて、後から文が追いつくこともあるだろう。第九二回で馬琴は文章の特性を次のように弁解していた。「看官熟思ひねかし。この日毛野莊介小文吾們が、敵と三処の挑戦は、皆是同時の事にして、長譚緩語の上にもあらず。各々其首に刃を交へて、勝者は捷、負者は輸、奔者は走り、逐者は趕しのみ、都て小霎時の事なれども、是を文に綴るときは、形容あり、語勢あり、三方四方を一緒に合して、写し得べきにあらずれば、思ふにも似ず長くなるを、恁はあらじといふもあらん歟。今に初めことながら、只瞬息の事なるを、数万言に綴れるも、則是文字に在り。又数百年の長々しきを、数行の筆に約するも、亦是文字のうへにあり」。

文章は時間的に展開していくもので、画と異なつて同時性を得意としていない。しかし、瞬間を長大に引き延ばすことができるし、長い年月を瞬時に圧縮することができるのである。

とりわけ注目されるのは、第六九回の画中にみえる一文である。画には殺生された鳥獸たちが描かれ、「禽獸の怨靈は文外の画なり。看官宜意をもて解すべし」と添えられている。これによれば、怨靈とはまさに文外の存在ではないだろうか。文には存在しないけれども、文に取り付くのが怨靈なのである。あるいは画こそ怨靈だといつてもよい〔4〕。文には存在しないけれども、勝手に取り付くのが画だからである(第六九回の絵が球体を撃ち込む場面であることに注目しよう、『八犬伝』では球体が撃ち込まれるとき、きまつて怨靈が立ち現れるのである)。

巽夫婦の物語は馬琴の絵師に対するコンプレックスを示している。馬琴は、欲望に塗れた絵師に対して道德的な優位に立つ。にもかかわらず、絵画のもつ脅威を語らずにはいられないからである。絵師の欲望に去勢をほどくこと、それが瞳なしの虎の意味するところであらう〔5〕。

とはいえ、虎退治の物語は、単に道德的教訓的な寓話にとどまるものではない。巽夫婦の物語を経済的な視点からみてみよう。「九里平は、京に絵馬絵額の問丸あり、廻に其里より買取る故に、多く売れどもまうからず。然るを巽は画意あれば、画額の下地を同村なる、山幸樵六と喚做したる、樵夫に誂へ造らして、みづから十二生肖を画くをもて、駝馬運送の費なく、利市三倍のまうけあり」(第一四一回)。遠くから取り寄せると運送費がかかり、近くから調達す

れば、それだけ利益があがるという。

絵師の金岡が語った言葉を稚児は伝えている。「虎は外国にて、百獣の王とぞいふなる、猛悪威灵、豹狼に、百倍しめる毛属に待れば、這画倘亦脱出る、事しもあらば人を害ふ、不測の禍なからずや、と思ひ怕れて眼に点せず、胡意瞽盲に仕りぬ」。これによれば、虎を黄金の暴力として読み換えることができるのではないだろうか。権力に強いられ虎の眼を描き、そのために殺される画工は、「千金をもて誘ふ」仕業に屈服したようなものであり、富に破滅した芸術家の肖像ともいえる。黄金の途方もない暴力性。だからこそ、徳川幕府は資本主義を制限していたのである。それが瞳なしの隠微であろう。瞳を描いたとき、制限されていた資本主義は開放され、途方もない暴力性を発揮する。それが本稿の主張する「文外の文」にほかならない。市場とは商品が競合する戦場だからである。

注

〔1〕『八犬伝』における盲目の問題については、前田愛『『八犬伝』の世界』（『幕末・維新期の文学』法政大学出版局、一九七二年）や神田龍身「もう一つの『八犬伝』」（『文学』二〇一〇年七・八月号）を参照。馬琴における眼病のテーマの重要性がわかるが、馬琴の『月氷奇縁』は漢詩による和文の開眼と読めるかもしれない。漢詩を多用しているからであり、眼病から回復する主人公の名前が倭文だからである。『頼家阿闍梨性鼠伝』の場合は、主人公が盲目の琵琶法師となり復讐を断念している。

〔2〕馬琴が『墨田川梅柳新書』附録に引用する『秋夜長物語』には「梅若婦り来にけれど、わが事故に仏閣殿舎、火災に罹りしを悲しみ、泣く泣く文を書き、童にもたせて律師につかはし、瀬田の橋の下に身を投げてむなしくなれり」とあり、神童Ⅱ稚児ゆえの災厄が語られている。

〔3〕ジャック・デリダ『絵画における真実』上・下（高橋允昭、阿部宏慈訳、法政大学出版局、一九九七・八年）を参照。『八犬伝』の挿絵は窓などを利用して、二重の画面を構成していることが多い。それは画中の画でありながら、画外の画にもなっている。馬琴において文字の記された石碑が堅固な実在だとすれば、仮装を伴った絵画は潤色であり幻想である。

〔4〕「予が著したる物の本、或は合巻と唱る絵冊子の、ふりたる板家扶を購求めて、恣に画を新にし、且書名を改めて、そを新板に紛しつ、翻刻して鬻ぐものありと聞にき」と馬琴は絵師と資本家に対して不満を露わにしている（第九輯中帙附言。小谷野敦「父／作者の疎外」（『日本文学』一九九二年一月号）は父権制の危機と作者の疎外を関連させて『八犬伝』を論じているが、『八犬伝』における作者の疎外は絵師によっても資本制によっても生起する。女性・絵師・資本から三重に脅かされるのが作者なのである。ちなみに、『青砥藤網摸綾案』前集巻五は絵師の受難を描いている。

〔5〕馬琴の『標注そのゆき』にも眼病治癒が描かれるが、ここでは虎が虚に通じるという。『後覺僧都嶋物語』には鬼一法眼のもつ虎の巻が出てくるが、それは探求するべきものであると同時に破滅をもたらすものといえる（これも談合谷の物語である）。虎兇・眼球・破滅には密接な関連があり、「皇国にはなき虎をしも出す者三たび也」と馬琴が自信満々に記す理由であろう。

## 九 神童・王権・収束——戦場と市場

第九輯卷三十三簡端附録作者総自評で馬琴は「後の姦淫を誡る作者の隠微」を説いている。しかし、そのようなものは作者の主観的な思惑にとどまる。「誰か虚実を分別して、作者の隠微を発明せん」と記しているけれども（第一六一回）、虚実の分別など容易にできないからである。善悪の分別もまた容易ではない。作者の隠微など、その程度のものであろう。重要なのは作品自体が体現している隠微である。作品には女たちの姦淫がしばしば描かれているが、そこから浮かび上がるのは道徳性というよりも、むしろ欲望の強度である。欲望の強度、その点において玉梓、亀篠、船虫、妙椿の存在が必要とされるのである。これを欲望の系列とすれば、対照的に禁欲の系列が存在する。

『八犬伝』において特徴的なのは八犬士の禁欲性であり、その禁欲性はとりわけ食欲において顕著である。八犬士はほとんど食することがない。第五五回では小文吾の前に美食が並べられるが（一）、徳目によつて食欲を昇華している（「物食ふ毎に、必まつわが玉を舐りて、彼毒計をぞ祓ひける」）。口が食らう器官であり語る器官だとすれば、八犬士たちは食らう器官の欲望を抑圧し、口をもつばら徳目を語る器官として使用するのである（ただし、『美少年録』は馬琴にとつて例外的な美食小説といえる）。

「其が身辺には、髑髏に灰を装て、香炉に代しに、焼る抹香の煙、靡きもやらず消つつ起めり」とあるのは占いをする風外道人こと、大法師の描写だが（第二五四回）、この煙は欲望を拒絶するものにほかならず、次の細部と響き合う。「作者少選禿筆を閑きて、且一服と煙を吹きつつ、漫に独語て、道らくく」（第一五六回）。この一服に見て取れるのは美食に耽ることのない禁欲性である。選択されるのは蜜ではなく、灰ということになる。煙による幻術という点で馬琴と妙椿には共通性があるが、第九輯で用いられるのは風を自在に起こす玉、妙椿所有の「奇貨」にほかなら

ない。

「本輯前前回より、もてここに至るまで、密議商量の段甚多かり。皆是後回の襯染なれば、いはざることを得ざりけり。大凡其趣ありて、看官なべて飲ぶべき段は、誰も綴まく欲すべし。しかるにかかる花もなき、平話を載て、丁寧反覆して、もて綴做せるを、則作者の苦界とす。馬琴は派手な事件ではなく、地味な会話ばかりを記しているが、それは美食ではなく煙を吹いているようなものかもしれない。「丁寧反覆」こそ馬琴が何度も強調している言葉である（「惑へる婦幼、及事を好む雅俗を、いかで窃に覺さん」とて、丁寧反覆して、もて綴りたり」卷之二十九簡端或説贅弁）。丁寧反覆のうちに紛れ込むのが仮装であろう。風外道人や売卜師は、大法師、大角の仮装であり（第一五四回「齒は並べたる瓠瓜仁の像く」の一節は玉梓を連想させる）、毛野の作戦にほかならない。では、いったい誰が信頼できるのか。

「人の人にもこのいふ時、言の虚実を知らず欲せば、先其人の瞳子を見よ。瞳子恁々なるときは、恁々也」と毛野は語っているが（第一五六回）、すべての作品は瞳なしなのかもしれない。瞳を見ればすべて理解できる、そんな作品など存在しないからである。「回外刺筆」の主人は盲目なので、その言説の虚実は判然としないことになる（盲人と聾者の対話であるかのように、それぞれが一方的に喋るばかりである）。

「敵は千代丸を面善ねば、必其眼兒に、刀自等一兩個をば、其が儘船に留在せて、水戦に将てゆくべし」と毛野は語る（第一五八回）。敵は当該人物の顔を知らず、いわば盲目である。それゆえ顔を知っている女性を同行させるにちがいないというのが毛野の推測である。これは盲目の馬琴の傍らに女性が不可避である状況と重なるだろう。

毛野は軍師として仮装の作戦を展開するが、そのとき活躍するのが間諜である。「然ば友勝に投られて、死せりと見えたる件の漢子は、姑且して頭を拾げて、亀の像くに四下を見かへり、蛇の似くに五体を伸して、やをら身を起して、汀渚なる、潮水を掬びて洗ふ鮮血は、予準備の鰯臙脂なれば、洗ふ随に痕はなし。臙て手拭をもて幾番敷、面を拭ひて、莞やかに、独笑して洲崎なる、陣所へかへり行なるべし。こも亦毛野が謀る処……」（第一五八回）。アクシヨンと笑いに満ちた見事な場面である。敵の間諜を釣り出し、かえって味方は手引きを得ることになる。

第一六〇回では人質の解放をめぐつて手紙の策略がなされるが、毛野は次のように発言している。「縦今、赦免の御

書を賜りて、信隆実は帰服せず、地に謀るよしありとも、扇谷の士卒那意を悟らで、御書ある事のみ知らば、反て信隆を疑ふべし」(第一六〇回)。

手紙の内容を信じるべきか否かかわらず、手紙の存在自体が一定の効力を發揮するというのである。作品もまた、そうした手紙の一種であらう。しかし、その効果の測定は容易ではない。馬琴は第九輯で作品を論じるときの禁則を五つ挙げてゐる。

吾常にいふ、達者の戲墨を評するに五禁あり。所謂仮をもて真となして、備らんことを求る事、評者只其理論をもて、好む所へ引つくる事、作者の深意を生索にして、只其年紀などの合ざるを、見出さまく欲するは、俗に云、穴搜の類なる事、前に約束ある事の、久しくなるまで結び出さざるを待かねて、催促しめる事、神異妖怪は始ありて終なく、出沒不可思議なる者也、然るを其出処來歴を、詳にせまく欲りし、其消滅して終る所の安定ならん事を求るは迷ひのみ、作者の本意にあらざる事、大凡この五禁を知りて、よく吾戲墨を評する者あらば、そは真実の知音なるべし。

(第九輯卷之三十六間端附言)

作品は現実とは異なり、読者の論理とは異なる。したがつて、作品の時間は現実とは異なり、作品の展開は読者の期待とは異なり、作品の怪異は読者の期待とは異なるということであらう。馬琴は作者・作品・読者の関係について述べてゐるわけだが、ここから『八犬伝』のテーマを再確認できる。なぜなら、『八犬伝』のテーマもまた作者・作品・読者の関係にかかわつてゐると思われるからである。作者は約束という名の負債を読者に負う。そのため怨霊のように付きまとうのではないか(怨霊の効果)。作者には読者が付きまとい、読者には作者が付きまとうのである。しかも、そこには明確な始まりも終わりもない。作品は仮装であり、非現実である。あくまでも「仮」であつて、現実のものではない(仮装の効果)。しかし、それにもかかわらず、現実において力を發揮するのが作品である。

大阪にて浄瑠璃に作れるあり。其院本は長編にて、四冊ばかり出たりとか聞にき。況錦絵には、八犬士を画きたる者、京江戸大阪にて、年々に彫りて、今も猶出すめり。只是のみにあらずして、諸神社の画額及燈籠にも、犬士を画ざるは稀也。

(同附言)

虚構であつたはずの作品が、現実において様々に展開されるのである。馬琴が演劇から借り受けたものが、再び演

劇に取り戻される。馬琴が絵画から借り受けたものが、再び絵画に取り戻される。こうした交流のなかに作品は置かれている。亡霊であつたはずの作品が様々な利殖を生み出す資本になつたかのである（資本の効果）。

御霊会をみれば明らかだが、王権は亡霊を管理する（馬琴の『俳諧歳時記栞草』『祇園祭』の項目には「円融院、天禄元年六月十四日、御霊会を始め、今歳よりこれを行ふ」とある）。なぜなら、亡霊が思いがけない剰余価値を生み出しかねないからである。王権は亡霊を回収し、独占するのである（王権の効果）。同様に、王権は商品を取り締まらずにはいられない。なぜなら、思いがけない剰余価値を生み出すのが商品だからである。商品にはいわば亡霊が取り付いており、様々に仮装されて巨大な資本を生み出すのである（亡霊＝資本主義）（2）。

作者云。約這水陸三个所の闘戦の勝敗結果は、皆是十二月初の八日にて、同日の事也。然ども今詳に、是を編次に及びて、三所を駁雜して、綴るべくもあらず。ここをもて、初に行徳口なる、二犬の戦功を具にし、畢て、次に国府臺、又其次に、洲崎の水戦を具にす。一戦終て又一戦始るにあらず、俱に是同日の事なるを、看官宜く照見るべし。蓋この水陸大兵大戦の一挙は、予が腹稿二十余年の今に至りて、一事も遺れ漏すことなし。然るを人或はいまだ結局大団円まで閱せずして、第四輯に約束ある事を、予が遺れて漏せし歟とて、遙に人伝をもて、其書を作者に見せまく欲して驚しおくなどと、いはるは無礼ならずや。

（第一六四回）

物語内容は作者が複数の時間に渡つて構想したものだという。馬琴は苛立たしげに、かつ得意気に記しているが、ここには作者の同一性が見て取れる（もちろん、多年の約束は作者にとつて負債であつたはずである）。また、複数の戦いが同日に行われるということは、それを意図した同一の主体が存在するはずである。すなわち、里美家である。ここには王権の同一性が見て取れるだろう。さらに出版の主体にも注目する必要がある。

作者云。本回は、文いよいよ多きをもて、釐て前後二巻とす。一回を分ちて二巻に做すこと、いまだその例なきものから、本伝刊刻の書肆、文溪堂の好に儘せて、全部九十六冊にせまく欲すれば也。

（第一六五回）

同一の作者、同一の内容であつても、冊子は複数に分割されるが、出版者は同一である。したがつて、資本の同一性を見て取ることができる。『弓張月』でも『八犬伝』でも『大団円』において王権の統一がなされるが、作者、商品、資本の同一性を象徴する言葉が「大団円」なのである。

本稿では『八犬伝』における怨霊、仮装、王権に注目してきた。いまやそれを作者、商品、資本と読み換えることができるだろう。なぜなら、作者とは、資本のもとで仮装された商品が売りに出されるたびに、亡霊のごとく怨念を募らせる存在だからである。その証拠は枚挙に遑がない（作者論とは亡霊効果の問題であろう）。

第一六二回冒頭にみえるのは、いわば三重の亡霊である。「復讐満呂再太郎信重、安西就介景重は、然しも負しく思ひたる、満呂復五郎重時が、矢場に敵の鉄砲に、撃れて水底に湊みしかば、勢ひ折けて哀に堪ず、只共侶にうち歎きける、志を勵しつ、即便再太郎が意見もて、就介を扶掖ひきつつ、又那敵の由断あるべき、今井の柵の横隊なる、柳の枝垂し辺に、凜ぎ行潜び迹就て、内に入らまく欲するに、怪しむべし、件の垂たる柳の杈股に、其乎非乎、人ありて、手を抗て我を招くが如し。朦朧にして安定ならぬを、熟とよく見れば、其人の為体、烏革絨絨の身甲に、釵脛衣して、腰に兩刀を帶たるが、宛重時にぞ似たりける。再太郎と就介は、俱に驚き且訝りて、左右なくは得找まず」。死んだと思われた者が甦り、生きている者が死を覚悟している場面である。馬琴の友人トリオにみえなくもないが、三者はほとんど亡霊のように重なり合うのである。

重時、信重、景重はそれぞれ奇貨と返忠の挿話を背後にもっている。安西、麻呂はもともと義実に滅ぼされた一族だが、里見の家臣となる。似せ首を「奇貨」とし「返忠」を装い素藤に近づき、暗殺を企てたのが安西出来介たちである（第一一四回）。その息子が就介景重であり、再太郎信重とともに反復を印象づける。里見家によって安西、麻呂一族の統合がなされるが、そうした系図がすなわち資本といえる。重時は鍛冶屋で二人に出会っており、そこには仮装した作者、商品、資本の関係を見て取ることができる（鍛冶屋は確かに金銭を受け取っていた）。

仮装を伴った戦略を実行するのは、またしても毛野である。

由充も亦朝良もこの日は、暈昏より天結陰りて、八日の新月、影見えず、波上いと暗くて、投方安定ならざれば、只是援兵の、艦なりけりと思ふのみ、其詰朝這諸船の、安房の洲崎に果るまで、身は是虜にせられしを、毫も知る由なかりけり。

（第一六四回）

小文吾、莊助に破れた敵は助け船に飛び乗るが、それは毛野の用意した船であった。敵は援軍によって助けられたと思ったとき、実は人質になっている。味方さえ欺くエキセントリックなトリックである（第一六五回では八犬士に

ついで「齒は瓠の実に似たる」と記されており、思いがけず八犬士と玉梓の類似を示している。

第一六六回で親兵衛は走帆から青海波へと馬を乗り換えているが、これは『八犬伝』冒頭の神餘氏の挿話と響き合う。神餘は自らの馬を失い、別の馬に乗ったために災いを受けるのだが、親兵衛の場合は逆である。親兵衛は一頭の馬を失うが、また別の馬に乗って、いっそう活躍するからである。

そこで親兵衛は「水戯水馬の術をのみ、いまだ学得ざりし」こと、伏姫の夢告があつたことを語っている。「我始より這一術を、汝に教ざりけるは、故意欠く所をもて、懲してみづから其箴に、なさしめんとて也けり。然りけれども、今戦国の時に当たりて、水戯水馬を学び得ずば、戦場に臨むといふとも、何をもてよく波を被ぎ、水を涉して敵を征服せん。或は君將の危きを拯ひまつり、或は身の亡ぶべきを保つに至るも、水を知ざれば善しかたかり。勉めよかし」というのが、その夢告である。戦場において不可欠の技術である水練は、市場を生きる馬琴にとって不可欠の技術である著述に相当するのではないか。

第九輯で馬琴は、智と才について記している。

智は知也。人生れて耳目の及ぶ所、物として知ざるはなし。知るといへども其理を極めて、是を辨ずるにあらずれば、智の要を為さず。格物致知は、則学者の先務也。雖然、是を知る而已にして、慧なき者は悟るに由なく、才なき者は智を致すこと得ならず。

(第九輯下帙下套之中後序)

この智と才は、毛野と親兵衛について語っているのかもしれない。智の玉を有する毛野が仮装の人であるのに対して、親兵衛は神童であり、はじめから才に恵まれている。そんな神童が王権を支えるのである。

「我神葉は、幾千人に、用るとも尽ることなし」と親兵衛は語っているが(第一六九回)、この神葉は貨幣のようなものではないだろうか。「敵自家の差別なく」用いられるのが、貨幣の働きだからである。ここに「底不知の坑」の挿話が出てくる点は興味深い。「試に石を投入れ候へば、水音幽に聞ゆる折あり。然れば底は地黎耶にて、捺落にや続きけん。ここをもて誰いふとはなしに、底不知とこそ喚做候なれ」と由来が語られているが、貨幣と無底の穴は、無限性において共通するところがあるだろう。「若們何とて埋ざるや」とあり、江戸の干拓時代を想起させるが、底不知の穴は埋めて耕地に変えても消滅するものではないだろう。それはいつでも穴を開けて待っている。貨幣の無限性も人



を陥れる穴のようなものである。

無限の神薬をもつこと、無限の穴に落下すること、それらは親兵衛の特権にちがいない。親兵衛だけが無限に触れることができるのである。素藤の蜜は枯渇してしまつたが、親兵衛の神薬は尽きることがない（重時が用いた人魚の脂のほうも有限である）。

神薬は人を救うだけではない。「其奴撲傷亟に癒て、身の掙き自由にならば、必又窃盜をせん……この故に我は他にのみ、敢神薬を与へざるは、是情なきにあらず、反て慈悲也、仁の術也」と親兵衛は盗人について語っている（第一六六回）。これを見ると、神薬は破滅をもたらすものでもある。「神薬をもて敵自家の、死を救ふ神童あり」とあるが（第一七〇回）、神薬をもつた神童も救済をもたらすだけではない。時として破滅をもたらしかねないのである。

神薬の反対は、酒という狂薬である。神薬に限りなく似るが、それとは反対の力を發揮している。「現是酒は狂薬にて、礼に始り乱に終る。武佐素より強飲なるに、隊の兵も咸高量にて、吞こと宛大蛇の如く、刺こと恰も蜂に似たるに、音音は喫まず、よく提擲て、昔採たる杵柄の、春謡にあらなくに、興を添たる早歌に、舌も遶らぬ武佐と、俱に衆兵乱酔して、舷に凭れて反吐を突くあり、額を敲きて呻吟くあり」（第一七二回）。

狂乱の中で音音だけは酒を口にしない。より大きな祝祭のためである。「間もあらせず、音音は鉄砲拿更して、船の内に積掛けける、囊の火薬に擲ちて、身を仰さまに船より、海へ炎と飛入りける。其水音と共侶に、火線の燬児許多き囊の焰硝に、發と燃移る這時速し、猛火激烈、威勢迅速、現百千の雷の、一度に墜るに異ならず、人はさら也、柴さへ船さへ、一瞬間に焼尽されて、遺るは僅に船底のみ。」（第一七二回）。水音と爆裂音が鳴り響いているが、音音の名前がここで際立つのである。これは、かつて音音が家に火を放つて逃げ延びた場面の反復にもなっている。

火を通したものを列挙しておこう。それは重時たちの焼き討ちであり、火猪であり（岡の下なる敵陣へ、勇る火猪の数を尽して、放ち蒐放ち遣る、勢ひ脱兎に異ならず「第一六五回下」、爆発する船である。こうして「八百八人」の計略、すなわち風と火の作戦が成功する〔3〕）。

第一七五回は題目に「礼儀時を失ふて時に為こと有り」とあるが、犬士たちが生きているのは、失つたり得たりするような時間の世界にはかならない。それに対して、神隠しにあつた親兵衛だけが無時間的な世界にいたのである。

第一〇四回以後の親兵衛は、無時間的な世界にいた神童がどのようにして時間と遭遇するかを示している。しかし、第一八〇回になると、親兵衛は無時間的な世界に舞い戻ってしまうかのようである。一種の神仙世界となるからである。神薬が消えてしまうが、無時間の世界において神薬はもはや不要ということであろう。神薬が意味をもつのは、時間的な世界においてだけである。

第一七六回は題目に「禍福反覆して三士功を同くす」とあり、反覆が前景化されている。すなわち、繰り返しとひっくり返しである〔4〕。「義同の左右の腕を、摧るばかりに無手と拿て、挫と振伏せ登し蒐りて、宛虎を結紐るが像く、緊く索を被しかば……」というところは、親兵衛の虎退治を反復している。新井城の三浦義同を生け捕りにした九郎と八郎は、船が転覆しかかった危機を語る。

水路を京師に赴く程に、其舩遠江灘を過る時、凶類や憑にけん、行も得やらず波濤に捉られて、反覆んと思ふこと、屢なれば、誰もかも、更に活たる心地せず、皆死を極めて在りける程に……

(第一七六回)

九郎と八郎は親兵衛とともに上京することができず、虚しく帰還するところであつた。しかし、義同を生け捕りにしたことで、里見方に大きく貢献することになる。大角は「禍福は糾ふ纏に似たり。こも伏姫神の冥助なる歟、不測といふも余りあり」と讃えている。

興味深いことに、「反覆」という言葉が出てくるたびに、伏姫への言及がなされる。その意味では「伏姫」が反復と反覆を司っていたといえる。つまり、伏せられたもの、秘められたものが「反覆」を促していたのである(大阪の「反」でもある)。「覆水は盆に復らず、咄言は馬も及ぶべからず」とあるが(第一七九回下)、覆水は別の形で反復されるというべきだろう。しかも、それは突然の反復である。義実の法名が「突然居士」であるのは偶然ではない(第九七回)。

注

〔1〕 第五二回で猪を仕留めた後、第五六回で美食を振る舞われる小文吾は、猪のごとく肥え太るよう仕組まれていたのではないか。毛野の皆殺しによって、小文吾はそうした年獄から脱出するのである。第一六五回における猪の火戦は、食ったり食われたりする猪コンプレックスから解き放つものであろう。

〔2〕 資本主義の亡霊性については、ジャック・デリダ『マルクスの亡霊たち』(増田一夫訳、藤原書店、二〇〇七年)を参照。亡霊は戦場だけでなく、市場でも彷徨く

のである。

〔3〕小谷野牧『里見八犬傳』の龍女たち」（『馬琴』若草書房、二〇〇〇年）は『八犬伝』後半に至ると『善惡未分の混沌とした世界、男たちの二元的な世界觀を混亂させる女性たちの世界』が消え去ることを指摘するが、それは火を通したものの出現に関連していると思われる。湿ったものが乾いていくのである。伏姫が湿った女だとすれば、苛烈な「北母」熊大刀自は乾いた女であろう（自殺する蟹目前は第二の伏姫であり、名前に目が象眼されている）。

〔4〕反復にはもう一つ意味があつて、それが跳ね返しである。「いひ喘め反復して」（第九〇回）、「反復さんとなほ問極く……」（第九二回）。繰り返し、ひっくり返し、跳ね返しとしての反復に注目してみなければならぬ。伏す、服す、復す、この同音異義語にも注目する必要がある。

## 一〇 大団円と回外剩筆——手紙・虚構・作品

第九輯卷之四十六簡端附言で馬琴は次のように記している。「本編の題目は、先板卷の四十五までの、総目録の下に、夙く附出せしは、いかで看官に、結局までの趣を、知らせまく欲しし僻所為にて、彼六回は、当日腹稿の大概を挙たるのみ。其後本編を編るに及びて、予思ひしより、長くならざることを得ず」。ここには先取りと事後訂正があるが、要するに反復ということになる。「長くならざることを得ず」というのはまさに蛇のようなエクリチュールである。それに最も貢献するのは毛野であろう。

「事の起本に保質に、捉れし刀自等は主と做りて、反て両箇の保質を、捕獲しは不用意にて、造化精妙、亦奇也」と毛野は語っている（第一七七回）。人質が逆に人質をとる、これが仮装にふさわしい反転なのである。

男女を越境していた毛野はいまや男女を整除する。「大阪毛野は、妙真音音、浦安友勝等を案内にしつつ、則後堂に赴きて、河堀殿と、貌姑姫に見参す。其事男女の礼を乱さず」（第一七七回）。このような男女の媒介は毛野だけに可能なのかもしれない。

文明一六年二月、ゝ大法師を導師として大規模な施餓鬼が七日間、行われる。「念仏十遍声の中に、数珠をうち揮りうち払ふ、縦横無碍の法力に、奇しきかな、識算の、八の玉を串きし、数珠の緒、弗と振断離られて、海へ炎と入る

よと見へける、那時遅し這時速し、渦く潮水に波瀾逆立て、百千万の白小玉、忽焉として立升る、白氣と俱に中天に、沖りて宛衆星の、烏夜に晃くに異ならず」とあるが（第一七八回）、これは白氣が立ち上った伏姫受難の場面对応しているだろう。

「両敵戦死数万の亡魂、拔苦与樂の利益に遇へるは、正に是里見の仁義と、大法師の大功德に、あらずと孰かいふべきや」と皆が感嘆敬服している。この宇宙論的ともいふべき救済場面を見ると、船虫や素藤の欲望は、その矮小さだけが際立つ。むしろ、八犬士たちの禁欲こそが欲望の大いなる循環と更新を導いていたことになる（食物連鎖であり欲望の連鎖である）。施餓鬼への言及は『侠客伝』冒頭にもあり、重要な儀式といえる（「1」）。そして、和議が成立する。

既にして助友東震は、誓書を捧て三浦にかへり来つ、又胤智孝嗣は、連署の誓書と、定正顕定の謝書を受拿りて、洲崎の臺にかへり来て、俱に反命を致す程に、夕陽西に斜也。登時義成義通は、八犬士を将て臺を下りて、俱に波瀾尽処に、定正顕定も、来会の大小名を将て、俱に浜辺に立出て、東西一霎時眺望て、各揖讓して退散す。是にて会盟果にけり。（第一七九回下）

手紙の交換は、王権の安定を意味している。しかし、「内乱の兆しあり」という予告の通り、王権は解体へ向っている。第一八〇勝回下編には「うつものも撃るものも土器よ、碎けて後はもとのつちくれ」という辞世の歌が紹介されている。馬琴辞世の歌にも「世の中のやくをのがれてもとのままかへすはあめとつちの人形」とあるが（『戯作六歌撰』、碎けて土に戻るのが土器作りの運命であろう（この「かへす」は復帰であり反復である））。

馬琴は仏事が多いことを弁解している。「抑結城の法会より、うち続きて白浜延命寺に改葬の事あり。其後又水陸施餓饑の大法会あり。既にして最後に至りて、金蓮寺にて追葬の事、及拈華庵の結局あり。約莫一部の稗史小説に、恁まで仏事のうち続くを、厭はで綴り果しぬる、作者の用意を思ふべし」（第一八〇回上）。

なぜ、これほど仏事を繰り返す行うのか。それは家族に対して負債を負っているからであり、負債を返却しなければならぬからである。作者自身も善を勧め悪を懲らす約束という名の負債を負っており、仏事を繰り返す描かなければならない。

蓋先祖父母弟兄の為に祀を等閑にせず、追薦の仏事法会を修する義は、孝子忠信、順孫義士の上に、必欠べからざる所にて、本伝の大関目、善を勧め悪を懲す、約束の終にて、這事なくはあるべからず。然ども仏事は、孰も仏事にて、別にせんかたなき者なる：

(第一八〇回上)

單なる繰り返しにみえた仏事は、何のために行われるのか。それはもはや「先祖父母弟兄」のためではない。仏事を行ったということを社会に向つて示すために行っている。家族のためだけではなく、いわば王権にとつて仏事が必要なのである（そこには作法がある）。もちろん、こうした仏事が経済的な効果を伴うことは明らかであろう。その意味で、戦場と市場は結びついている。『八犬伝』の後半が退屈に思われるとすれば、それは王権と資本の論理が前面に出てくるからなのである。

すべてが整ったとき、「婚礼の式」もまた整う。野合ではなく、作法に則った結婚である（2）。それを象徴するのが赤縄であり、年少者には年少者のルールが適用される。動物との結婚が禁止され、人間との結婚が制度化されるといつてもよい。

手に手に其緒の端を拿て、各左手に是を結びつつ、引けば聊手敵あり。迭に引きつ引れつして、竟に放ち給ひしを、各急に手繰り寄すれば、果して那方の緒の端に、各其名簿を附られけり。

(第一八〇回下)

もちろん、実際にはすべてが一对一に対応することはない。なぜなら、浜路自体が二重化されているからである。浜路姫は親兵衛との密通さえ疑われていたのであつて、制度は重層性をもつといえる。『八犬伝』にインセストがあるとなれば、それは伏姫と親兵衛の関係であり（母と子のインセスト）、また信乃と浜路の関係であろう（兄と妹のインセスト）。それらは禁止されたことになる。魚の交換がルール化されるのは第一八〇勝回中編である。

そこで、大法師は次のように提案している。

於是乎、聖人仁義礼智孝悌忠信の八行を立て、もて人に教、人に警めたり。和殿等八犬士は、俱に八行具足の人也。何ぞ其文字の見れたる靈玉の、冥助をのみ負んや。縦其玉あらずとも、各八人の一生涯は、姫神看棄給ふべからず。目今玉を我に返しね。もて四天の玉眼にせん。

(第一八〇勝回中編)

八犬士は玉を返却するが、それは眼を奪われるに等しい。いわば瞳なしの犬士であり、馬琴は八犬士の力を封印し

たことになる。「瞳」が消えると「目」も消え「童」も消える。球体を返却すると同時に、文字も消え痣も消える。しかし、『八犬伝』は残る。馬琴は視力を失ったが、代わりに作品に入眼したといえる。飛び散った玉は文字であると同時に眼球であり、『八犬伝』とは目のパラドクスを不本意に孕まれた眼球譚なのである。おそらく、瞳なしの作品に瞳を点するのは読者の仕事である。

「世に神童と喚なす者は、年十歳に至らずして、書を善し、画をよくし、或は詩を賦し歌を詠み、文学をすら得ぬるもあるは、必人の遊魂の、虚弱の小児に馮たる也。この故に神童は、短命にして久しからず」と親兵衛は語っている（第一八〇勝回下編）。これによれば、神童とは亡霊のような存在であり、怨霊に限りなく近いことになる。しかし、頑丈な親兵衛は「我は其等と同じからず」と断言している。馬琴もまた短命な神童でなかったといえる。

大団円の後に「回外剩筆」が続くが、このことは大団円が真の終わりでないことを示している。大団円の外に語りつくせない剰余が存在するからである。それは読者の問題にかかわっているのだが、楽屋話は戌年から始まる。

文化十一年甲戌の春正月下瀬、本伝の作者曲亭主人、這小説を綴る為に、案を拭ひ硯に呵して、将新研を開まくす。時に廻国の頭陀あり、上総より到る。一日著作堂の松の扇を敲きて、主人に対面を請ふ。頭婢是を告ぐ。

（回外剩筆）

読者が著者に対面を乞うてくる。著者が病氣を理由に断ると、紹介の手紙があるという。

頭婢こころ得て、又出て頭陀に謝するに、主人の疾病をもてす。頭陀是を聞て、「否、野衲は、翁の相識某甲が、紹介の手簡を齎したり。枉て対面を饒させ給へ。」と連りに請ふて已ざれば、主人已むことを得ず、書齋へ招かれて、対面す。

（回外剩筆）

実は紹介の手紙など持ち合わせていなかったことが判明する（否其書翰は候はず）。ここでも馬琴は手紙の問題に悩まされているのだが、客人の嘘は虚構の問題へと発展していく。つまり、手紙から始まって收拾のつかない問題へと巻き込まれるのである。

「譬ば翁の物の本を作り給ふに、必勸善懲惡を旨として、よく蒙昧を醒すが如し。こも亦善巧方便のみ。然を翁

は思はずして、咱等を破戒と罵り給ふは、是誣言にあらずや」と詞急迫くいひ解けば：（回外剩筆）

嘘といつても悪に導く妄語と善に導く方便の二つがあると客人は主張するのだが、質問は作品の材料へと移る。馬琴は「里見記、里見九代記、房総治乱記、里見軍記」などを参照したと答えている。ここで注目したいのは、次の一節である。

語次に云、上古唐山の聖人、唐虞三代、及成湯文武の時は、民に取るに、井田をもてす。譬ば田一町方二百四十間なれば、則是を九に界て其中の一を公田とす。公田とは、貢米に備る義也。詩に雨我公田、遂及我私といへるは是也。天朝も上古はかくこそありけめ。（回外剩筆）

「九に界て其中の一を公田とす」として九つの升目が記されている。中心にある「一」はいわば王権である。中心がなければ、他の「八」の動きは自由であろう。これが『八犬伝』の構成原理である。里見家との繋がりがなければ、八犬士は自由な離合集散を繰り返す俠客でありアウトローだったはずである。また、中心にある「二」は作者自身だといつてもよい。『八犬伝』の成立がなければ、里見記、里見軍記など諸々の記録類は統合されることがないからである。

井田法にたとえるならば、中心にある「一」は馬琴である。しかし、その中心は様々なものに代替され補完されている。たとえば、息子の嫁であり、友人たちである。馬琴の稿本を目にした客人は「御稿本は女筆なるべし、何ぞて自筆にものしたまはざるや」と語っているが、目が見えなくなつた馬琴は息子の嫁に代筆をさせていたのである。盲目は代替と補完の戯れを生み出す空白であり、代補の条件といえる〔3〕。「水母以鰕為眼」の通り、他者の眼を代用しているからである。

「第百七十七回の中、音音が茂林浜にて、再生の段より代筆させて、一字毎に字を教え」と馬琴は語る。音音が泳ぐ場面だが、まさに泳ぐことが書き継ぐことのメタファーとなつている（親兵衛の泳法習得も含めて馬琴の小説は泳ぐことをめぐって展開しているかのようだ）。代筆させたとき、音音が再生するように、馬琴もまた再生するのである。第一七七回を振り返ってみよう。

休憩再説。この日十二月八日の暁天に、烈婦音音は料らずも、那大茂林の澳辺にて、仁田山晋六武佐の、柴薪船

の燔撃せし時、那身は蚤く大洋に、跳入りつつ燬を免れて、浮つ沈つ涸ぐ程に、音音は武蔵の川畔にて、成長たる甲斐ありて、水戯自得の老婦にあなれば、約莫一里余なる、波瀾を凌ぎつ辛くして、大茂林に就しかど、大寒の日に潮水に没て、且波風に揉しかば、身は冷、手脚疲労果て、我にもあらず做りにけん、岳に携りつ身を起して、ゆくこと僅に両三步、憶ず撲地と転輾びて、其が仮息は絶にけり。

(第一七七回)

馬琴において泳ぐことは、一貫して書くことと響き合っている。「我にもあらず」とは代筆を依頼した馬琴の心境であり、「ゆくこと僅に両三步、憶ず撲地と転輾びて」とは遅々として進まない仕事の進捗状況ではないか。森のあたり水からの出現は、出産場面にさえみえる。

息子の嫁に代筆させて以降、女性たちの活躍は顕著になる。家長が女子供の手助けを必要としたこと、それは馬琴にとつては最大の皮肉でありユーモアである。婦女子の文字能力は家庭的には偶然であつたけれども、歴史的には必然であろう。

「回外剩筆」で主人は「戯墨に門人といふ者なし」と語る。しかし、馬琴は様々な友人たちに助けられている。馬琴が列挙する知人たちの名前は犠牲者リストのようだ。「真葛てう才女も寡婦にて、吾には七ばかりの姉なりと聞えしに：女流なれば、辞して久しくは交はらず」。女流だからと突き放しているが、しかし、明らかに交流していたのである。文政二年四月二四日、真葛宛書簡には「やつがりも、はじめハはらかななり侍り。よたりはあになり、ふたりはいもと也。この四たりの兄は、いづれも世をはやうして、或はあげまき、あるハはたちあまり、或はよそぢを限りにして侍りき。いづれもやつがりには立まさりたるかたありて、もののふのころざし、いと堅固に侍りしかど、みな子といふものなかりしかば、家はあとなく絶侍り」とみえる。

八犬士に女装の二人がいることを考えると、馬琴の兄妹たちはまさに八犬士の雛形といえるだろう。家の断絶した兄たちを讀めるべく、馬琴は『八犬伝』を書き綴っているのである。「のこれるものは、いもとのみに侍れども、かれらはよのつねなるをみなにて、ころろざまいと浅はかなれば、よろづ言葉がたきになるよしもなし」。これを見ると、馬琴は心の通じない妹たちの身代わりとして真葛に接しているようである。

「言の便宜に思ひ出て、儂れば三十余年の、昔にぞなりにける。人さまざまの世にこそ、といひつつ火盤を曳よせ



て、一霎時烟を吹程に……」と続くが、これは原稿を書き綴っているうちに一枚の齒もなくなつた馬琴の姿であり、亡くなつた者たちへの追悼の煙が立ち昇っている。蜜月は失われたのである。

「翁の旧作なる、画策子物の本を、恣に再板して、是を翁に告ず、己が自恣、画像を新しくして、剩像賛詞書などを増減もしつ」と主人は語る。無許可版はいわば目の入っていない絵のようなものである。だが、目を入れたときには、作品に復讐されるという危険が待っているのではないか。

馬琴が再び視力を甦らすことはできない、もしそれが可能であつたならば、逆に災いを招くはずである。人生を意のままにしたならば、逆に人生から復讐を受けることになるだろう。「塞翁が馬」の故事を尊重する馬琴にとつて、視力の回復は祈願であると同時に危惧であつたといえる。そんな盲目の老人こそ裸の人ではないだろうか。『八犬伝』とは、泣き叫ぶ赤子から盲目の老人への変奏の物語なのである。

「八房の犬の毛色の、形牡丹の花に似たとあるを訝りて、這義を吾に問し者（中略）皆不幸にして身故りにき」。毛を巡つて時間がたちまちにして経過し、その間に多くの人が亡くなつたことを記している。この「毛」は、書くとき馬琴が用いていた用具と響き合う。「回外剩筆」の末尾には「戲墨新奇長 多編有是書 学仙師硯寿 毛穎汝何如」とあるが、『八犬伝』における毛野の重要性にも繋がるだろう。

馬琴が書き記した「回外剩筆」は大団円の不可能性を示している。『八犬伝』はいわば回内の物語と回外の剩筆の対立抗争、闘ぎ合いによつて成り立っていたのである。「闘」ほど戦う八童子にふさわしい文字があるだろうか。

『八犬伝』の挿画は数多いが、最後に溪斎英泉の二枚に注目しておきたい。一枚は『八犬伝』第七輯末尾の闘牛図である。原図は鈴木牧之が提供したものという。わらわらと集まつてくる辺境の人々があり、すべてが集中する力のある。ここからは他者の力を導き入れようとする馬琴の姿が垣間見えるだろう。しかし同時に、鈴木牧之という他者に脅かされる馬琴の姿が見て取れるのではないか。出版の約束は玉梓の言葉のように重みを増していたはずだからである。

もう一枚は『八犬伝』第九輯末尾の安房国図である。実際に英泉が写生したものというが、安房国が閉ざされた王国として描かれる。しかし、そこには無数の方向に幾つもの力線が走っているように思われる。

## 注

〔1〕『八犬伝』と十二支について考えると、出番が少ないのは鼠、兔、蛇、羊ということになるだろう。ただし読本に『頼家阿闍梨怪鼠伝』があり、随筆に『鬼園小説』があり、それぞれ補っている。他の読本に頻出する蛇も『八犬伝』では自粛しているようである。主要な場面を挙げると、牛（第七三回）、虎（第一四一回）、兔（第六八回）、龍（第一回、第一五回）、蛇（第一二四回、馬（第一〇三回）、猿（第八八回）、鳥（第七〇回）、犬（第八回）、猪（第五二回、第一六五回）ということになる。おそらく馬琴にとつて施餓鬼とは、そうした動物誌が収束する地点なのである。

〔2〕馬琴の『夢想兵衛胡蝶物語』前編二巻末に「男女の非礼を野合といふ、この故に、要るに必ずまづ媒をもてす」とある。媒介という文化的制度によつて野合は禁止されるわけである。

〔3〕本稿は前田、松田、濱田、高田、徳田、内田、神田、柴田等の論考を参照してきたが、井田法のレトリックに導かれていたことになる。

## おわりに

本稿では玉梓、毛野、親兵衛を中心にみてきた。すなわち亡霊、俳優、神童だが、そこから『八犬伝』における怨霊、仮装、王権という三角形を指摘できるだろう。それぞれが自律的領域を形作っていることはいうまでもない。しかし、それぞれに関連性があり、二つの方向が考えられる。一つは、怨霊が仮装を支え、仮装が王権を支え、王権が怨霊を支えるという方向である。怨霊は仮装という形で出現するし、仮装はその華やかさで王権を飾り付けるし、王権は自らの負の側面として怨霊を保持することで基盤を固めている〔1〕。

もう一つは、王権が怨霊に背き、怨霊が仮装に背き、仮装が王権に背くという方向である。王権は怨霊をたえず抑圧し続けるし、怨霊は仮装にすべてを委ねたりはしないし、仮装は時として王権を裏切ってしまう。怨霊とは負い目の意識であり、王権とは負い目による統合である。とすれば、仮装は、そうした負い目を利用しつつ振り払う行為でなければならない。

以上が『八犬伝』の三角形だが、それは作者、商品、資本という三角形に置き換えることもできるだろう。二つの方向を示すと、一つは作者が商品を支え、商品が資本を支え、資本が作者を支える方向である。作者は創意工夫を

もって商品を作り、商品は売れて資本を増やし、資本は作者に利益をもたらす。もう一つは資本が商品に背き、商品が作者に背き、作者が資本に背く方向である。資本は商品を勝手に販売し、商品は作者を呪詛し、作者は資本の意図を裏切ろうとする。

「回外剩筆」には「名利の為に身を忘れて、無益の筆硯に耽るにあらねども、少かりし時に慙に、義侠の心ありしかば、今に至て其癖うせず、一旦書賣に諾ひし稿本を、等閑に做す時は、他等は発販の時日後れて、利を失ふこと尠からず。是も亦不義に似たれば、事のここにあべるを、思へば愚に候ひき」とある。馬琴は資本家と約束している。約束は負債となつて押し掛かるが、それによつて利益も生れるのである。馬琴は盲目を代償として利益を得たといつてもよい。王権の物語内容と資本の生産様式、『八犬伝』はそうした二重性を有している。王権の求心性を解体していくのは資本主義の遠心性だが、その過程で誕生するのが近代社会ということになる〔2〕。

注

〔1〕 怨霊・仮装・王権を換言すれば、宗教的なもの、演劇的なもの、政治経済的なものということになる。宗教的なものは家族、演劇的なものは劇場、政治経済的なものは戦場、市場と結びついている。関東一円は戦場となるが、戦争という形の交易であり、そこに市場が形成されるのである。『八犬伝』について論じた怨霊・仮装・王権のテーマは、『弓張月』についても指摘できるだろう。すなわち、崇徳院、白縫、寧王女、舜天丸がそれぞれ体现しているものである。

〔2〕 王権と資本の問題に迫るべく、『八犬伝』を読み解いた本稿は、クロード・レヴィ＝ストロースの神話学を受けて、環太平洋神話の創造的な一環を、馬琴の読本に探ろうとする無謀な企てでもある。神話という観点からみると、『古事記』も漫画も同一の水準に位置づけられる。したがってそれは失われた環ではなく、いまだ生きている環なのである。とはいえ、神話と小説のずれのせいでわれわれは踏くほかないだろう。現代の馬琴を一人挙げるとすれば、おそらく『シンセミア』『ピストルズ』の阿倍和重である。

〈キーワード〉 玉梓、俳優、神童、使者と手紙、家と日記、市場と作品、稗史の法則、馬琴（八個に限定）

〈要旨〉 本稿では出典論に深入りすることなく、曲亭馬琴（二七六七—一八四八）の『南総里見八犬伝』をもつぱら小説として読み解いてみた。その際、特に注目したのは玉梓の怨霊であり、俳優に仮装した毛野であり、神童として

の親兵衛である。結果として玉梓、俳優、神童といったテーマの広がりがあるが、『八犬伝』を思いもかけない方向に導いてくれることとなった。『八犬伝』からみえてくるのは、怨霊と手紙、仮装と虚構、王権と資本の世界なのである。

訂正 本誌二七号二四頁三行目「姑摩姫の」(誤) — 「姑摩姫による流血の」(正)

同頁一二行目「ついに」(誤) — 「十分に」(正)

四〇頁一七行目「情動の矢」(誤) — 「情動の弓」(正)